



TITLE:

『オルジェイトウ史』が語るアジ
キ大王の系譜 --外交使節の往來と
歴史書の編纂(1)--

AUTHOR(S):

宮, 紀子

CITATION:

宮, 紀子. 『オルジェイトウ史』が語るアジキ大王の系譜 --外交使節の
往來と歴史書の編纂(1)--. 東方學報 2019, 94: 460-437

ISSUE DATE:

2019-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/250688>

RIGHT:

『オルジェイトウ史』が語るアジキ大王の系譜

—— 外交使節の往來と歴史書の編纂 (1) ——

宮 紀 子

1. はじめに
2. 『オルジェイトウ史』 A. H. 712 條

1. は じ め に

biryigirminč ay 十一月 < sākišinč ay 八月十九日 (1304 年 9 月 19 日) に相當する (704A. H) 2 月 17 日 (1304 年 9 月 19 日) の土曜日, Tīmūr-Qān ^{テ ム ル カアン} 鐵穆耳皇帝 (= 成宗) および šah-zādah Qāidū ^{カイドゥ} 海都王 / 太子の息子の察八兒 ^{チャ バ ル エルチ} の使臣たちの到着があった。皇帝 ^{カアン} の使臣 ^{エルチ} たちの名は ① Suldūs < Suldus ^{スルドゥス} 孫都思 (遜篤思) の Tamāgi < Temeči ^{テ メ チ} 鐵邁赤 (帖麥赤) / Tammači ^{タム マ チ} 探馬赤 ② Ğālāir < jalayir ^{ジャ ラ イル} 札剌兒族の Tūrčiyān ^{トル チヤン} 脫兒赤顏 (脫里察安 / 脫里赤安 / 朶兒赤延) ③ Ğa'far h̄wāghah ^{ジャ バ ル ホージャ} 札八兒火者¹⁾ の後裔の Mustafī h̄wāghah ^{ム ス タフイーホージャ} 木思答伯火者²⁾。察八兒 ^{チャ バ ル エルチ} の使臣 ^{ジャ ラ イル} たちの名は, ① 札剌兒 ^{ジャ ラ イル} 一門の Īsin-Tīmūr < Āsān/Esen-Temūr ^{エ セン テ ム ル} 也先帖木兒 ② Ğa'far ^{ジャ バ ル} 札八兒という小名のもの? ³⁾ ③ Qāvğatāi < Qavgatai 千戸^[補1] に屬する Ūrus bahādūr ^{オ ロ ス} 幹羅思 (幹魯思) 拔都兒 ^{バアトゥル}。Dūā/Duvā ^{ドゥ ア} 土哇 (都阿 / 都哇 / 都瓦 / 篤哇 / 朶瓦)⁴⁾ ^{エルチ} の使臣たちの名は, ① mānglai < Mon.manglai ^{マンライ} 頭哨 / 莽來 (フレグ・ウルの領域の最前線アフガニスタン方面)⁵⁾ の Sārbān ^{サルバン} 撒兒蠻 ② Abūkān < Ebügen ^{エ ブ ゲン} 也不干 (額不干) の息子の Tīmūr ^{テ ム ル} 帖木兒 ③ Aḡiqī ^{ア ジ キ} 阿只吉 (阿赤吉 / 阿直吉) の息子の Ānandah ^{アーナンダ} 阿難答。友好・友愛の講和・得策・道筋のために。

状況の眞實・口上の概要は以下のごとくである。

^{カイドゥ} 海都は, tawšqan yil ^{ガゼン} 長年 < tawšqan yil ^{チャク} 卯年, 太陰曆 702 年の 7 月 (1303 年 2 月 19 日 ~ 3 月 20 日), 公正なる Ğāzān ^{ガゼン} 合贊の čaq ^{テ ム ル カアン} 時分に, 鐵穆耳皇帝 ^{チエリク} の čerig 軍 との戦いより歸還し, 病氣の兆候にさらされた。そこで侍醫たる臣僚の Haidar ^{ハイダル} 海答兒はかれに下劑 25 粒を與

『オルジェイトゥ史』が語るアジキ大王の系譜

えた。腹痛をとまなう下血のうちに, Qarā-Qūrūm ^{カラコルム}合刺和林の疆域（へ一日行程の）
Qalan-baš の宿頓にて逝去した。

…[中略]…

閑話休題, ^{スルタン}算端（鎖潭＝オルジェイトゥ）は皇帝の使臣たちを慰撫し, 出立の許可を與えた…。

yilan-yıl 巳の年 <luu yıl 辰年 biryigirminç ay 十一月十日（1304年12月7日）に相當する 5月10日の水曜日（1304年12月9日）, Ulūs-i Ğūġi <joči ^{ジョチ}朮赤の ulus ^{ウルス}國 Qipčāq-bāš ^{キプチャク}欽察帽の諸城鎮の pādšāh 君主（^{カン}＝汗）Tūqtuā <Toqto'a ^{トクトア}脱脱 / Tūqtā <Toγda ^{トクタ}脱脱の根前より ^{エルチ}使臣たち —— かれらの先導は Nūḥudāi <Mon.Noqtai / Nu'udai という名の臣僚（^{ノヤン}＝官人） —— の到着があった。成就すべき講和・得策・一致の道のために⁶⁾。

これは、フレグ・ウルス（＝イル・カン國）の正史ともいうべきラシードウッディーンの『集史』第一部「ガザンの吉祥なる歴史」の續編のひとつに数えられ、『集史』第二部の編纂にも大きく寄與したとされるアブー・アルカースィム・カーシャーニーの『オルジェイトゥ史』の一節である。中略部分には、カイドウの死後、チャガタイ家の當主ドゥアがオゴデイ家の解體・中央アジアでの覇權のために動き出すさま、成宗テムルの死、ブルガン^{カトン}皇后が安西王アーナンダヤアリク・ブケ家のメリク・テムルと共謀してカン位を奪取した政變等が、數葉に互って記述されている。起居注・日録の類に依據した編年體の形式をとりながら（カンの季節移動と朝廷内の重要人物の死亡記事を中心に採録）、あいだに各ウルスのさまざまな逸話が挿入されるのである。

① 記事の重複、話題が前後するなど、整理されていない箇所が散見されること、② 各ウルスの王族の系譜にしばしば孫を息子とする等の誤りが見られること、③ テュルク・モンゴル暦との照合作業を機械的に行い書物全體に互って誤りを犯していること⁷⁾、④ イスタンブルのアヤソフィア舊藏本（A.H. 752年4月30日＝1351年6月25日, Aḥmad bn al-Husain bn Sātāq による筆寫終了の奥書）、それに依據しつつ筆寫者の知見によってヌクタを附したフランス國立圖書館所藏本の計二冊、實質的には一種の寫本しか知られていないこと、以上からすると草稿に過ぎなかった可能性もある（フランス國立圖書館藏の『集史』に附され、イスタンブルのヌール・オスマニエにも傳來する著者不明の『續編』の「オルジェイトゥ紀」と「アブー・サイード紀」は、『ガザンの吉祥なる歴史』の「本紀」の形式にあわせてそれぞれ3部構成とし、末尾に諸國史を附す。前者は『オルジェイトゥ史』の要約・再編⁸⁾といてよい—— 上述の部分についていえば、使者たちの名前は省略されている⁹⁾ —— ものだが、いっぽうで、

より詳しい記述も認められ、かつ文意もきわめて明快である。共通の資料を利用していることは間違いない。ラシードウッディーン『君主の鑑』に『オルジェイトウ史』と類似する記述が認められるので¹⁰⁾、かれがこの『續編』の「オルジェイトウ紀」のほんらいの著者／總裁官であり、ティムール朝でそのまま利用された可能性もある)。しかし、ジョチ・ウルス、チャガタイ・ウルス、カイドウの王国の「正史」が発見されていない現状では、『ヴァッサーフ史』等とともに、歴史の隙間を埋める重要な資料であることは間違いない。

さて、このフレグ・ウルスにむけての大使節團は、『元史』卷二十一「成宗本紀四」の“[大徳七年秋七月(1303年8月14日～9月11日)丁丑]、^{ドゥア}土哇・^{チャバル}察八而・^{メリクテムル}滅里鐵木而等、使を遣わして兵を息むを請う。帝は安西王(＝アーナンダ)に命じ軍士を^{つづみいしめ}愼飭、驛傳を安置せしめ、以て其の來たるを俟つ”、“[十一月(1303年12月9日～1304年1月7日)己卯] 諸王^{メゲトウ}滅怯禿・^{ウルングテムル}玉龍鐵木而を遣わし^{チャバル}察八而に使せしむ”といった一連の流れを受け派遣されたものである。しかも、そこから“Öljeitü sultan ^{オルジェイトウスルタン}完者都算灘、^{われらのウゲ}俺的令旨。佛朗國王^{スルタン}算灘根底”に始まり、“俺^{われらの}的文字は、(A.H.)七百四年裏蛇兒の年の夏^の的頭の月的舊八日(四月二十三日＝1305年5月16日)にAlivanに有る時分に^い寫^かいた”で締めくくられるフィリップ四世宛の有名な國書——“^{いま}如今、天行心を可與され^て着^{テムル}鐵穆耳皇帝、^{トクトガ}脫脫、^{チャ}察八而、^{バル}朶瓦を^{ドゥア}頭と爲す^{かしら}的每、^も咱每、^{われら}成吉思皇帝の子孫^{チンギスカンの}每は、四十五年自り以來、相怪責したことを^{いま}如今、天行護助被れ^に着、^さ衆くの^お哥哥・^あ兄弟が^{おとうと}相和^てし^{おひさま}着日頭の^{ところのナンキヤス}出的^の南家思的地面^の從り^よ要め^{もと} Dalu 海の裏に^{うち}到り、國を共に^の拿^{ジャムラ}し^を着、^し自^た然的^の站^の每行看せ^{した}教め了”¹¹⁾ という宣告へと繋がってゆくのである。

各ウルスの使臣として、正使1名・副使2名が挙げられるが、自前の軍を持つ駙馬・有力部族の高官、^{オルトク}幹脫集團を抱える財務官僚がその職責を擔うことは、『百萬の書』の3人の使臣(スルドゥス部の^{ウラタイ}兀魯解、オロナウト部の^{アビシュカ}阿必失呵、^{ホージャ}火著)を持ち出すまでもなく、『ガザンの吉祥なる歴史』の記事、教皇廳やフランク國王に宛てた國書等からも確認される。ここで注目すべきは、チャガタイ・ウルスの面々だろう。ほかと異なって、説明不要、周知のことととばかりに、出身部族等の手掛かりが一切記されないのである。

もっとも、この記事の少し後に“彼處(＝^{アム}阿母河)に來て殺されてしまった^{テムル}帖木兒の兄弟、^{エブゲン}也不干の息子^{ババ}のBābā ugūl 八八大王”¹²⁾ なる一節がある。『ヴァッサーフ史』にいう“Čingiz han ^{チンギスカン}成吉思汗(罕)の弟^{ジョチカサル} Güči-Qāsār 拙赤哈撒兒の曾孫、Baqa<Baqaの孫、^{エブ}也不干^{ゲン}の息子たちの^{ババ}八八大王・^{テムル}帖木兒”¹³⁾ のテムルと同一人物に相違ない(おそらく憲宗モンケ時代の征西軍の編成、あるいは中央アジアにもともと設定されていたジョチ・カサル家の投下領と関係があらう)。しかも

čaxšapat ay 十二月九日(1307年1月13日)に相當する [A.H. 706] 7月7日金曜日(1307年1月12日)、Timūr ugūl<ogul (≡Mon.kō'ün 大王／太子) ^{テムル}帖木兒大王と^{カイドウ}海都の

息子の Sārbān 撒兒蠻¹⁴⁾が 𐰽𐰺𐰍 歸附ニ奉仕の表明を以て参内した¹⁵⁾。

とあるように、二年半後にはフレグ・ウルスに亡命してくるのである（『ガザンの吉祥なる歴史』編纂時、ジョチ・カサル家のバガの系譜は知られていなかったが、『五分枝』には記載された。亡命後に仕入れた情報とみることもできるが、この使節團が来たさい、すでに各自が身上書を提出していたか、接見前に調書をとっていたか、あるいは筵席^{トイ}での會話等によって情報を収集していた可能性もある。『ガザンの吉祥なる歴史』の「部族志」には、同じトルイ家の大元ウルスとフレグ・ウルスの間を往來した使臣の情報が少なからず記される）。しかも、ここにサルバンという名も登場する。テムル大王が副使だったなら、正使をつとめたサルバンは當然それより格が上であり、矛盾はしない。『ガザンの吉祥なる歴史』には、

[Ūktāi Qāān オゴデイカアン 窩闊台皇帝の第 5 子 Qāši カシ 合昔の子海都^{カイドウ}の第 15 子／第 4 子*] 撒兒蠻^{サルバン}：
この撒兒蠻^{サルバン}は軍勢とともに阿母河^{アム}を渡って、Badaḥšān バダハ傷^{バダフシャン}（八打克沙）・Pangāb の疆域内にいる。常に Hūrāsān への企畫^{クワダテ}をなしている…¹⁶⁾

※系圖では第 7 子

とあり、“頭哨（先鋒）／莽來^{マンライ}（對フレグ・ウルスの最前線）”との冠詞とも合致する。同書が改訂された際には、

A. H. 690 (1291 年) に「Naurūz が撒兒蠻^{サルバン}・Abūkān ugūl 也不干大王・Üruk-Timūr オルクテムル^{オルクテムル}および Yasāūūr ヤサウル^{ヤサウル}の臣僚たち等とともに全軍を率い Hūrāsān への企畫^{クワダテ}以て至りつつある」との聲音が届いた。事由は以下の如くであった。その前、Naurūz が Harāt ハラト^{ハラト}の疆域から敗走した時分、海都^{カイドウ}の根前^{もと}に逃げ去き、多くの奉仕の後、軍勢を懇願した。海都^{カイドウ}は、かれの要請どおりにかれに軍勢を遣わし、かれの背後に自身の息子の撒兒蠻^{サルバン}をも軍勢と前去せしめた¹⁷⁾。

と書き加えられている。少し前の箇所“Naurūz は娘を Nīkbai ネグベイ^{ネグベイ}の子撒兒蠻^{サルバン}に與えていた”¹⁸⁾との一文（ナウルーズはガザン・カン擁立の立役者だったが、のちに失脚。ネグベイはチャガタイの孫で、バラクの後を繼いで三年間、チャガタイ・ウルスのカンの座に坐した）があるから、エブゲン大王の周辺には 2 人のサルバンがおり、いずれも對フレグ・ウルスの最前線にいたことになる。ドゥアの使臣としては、このチャガタイの曾孫のほうが理解しやすいだろう。ただ、ネグベイにサルバンなる息子がいた記事はほかに確認できず¹⁹⁾、カイドウの息子をネグベイの息子と取り違えていた可能性もある。それほどに、中央アジアではチャガタイ家とオゴデイ家の面々が離合集散を繰り返し、混然とした情況だった。サルバン、エブゲン等とともにナウルーズに協力したオルク・テムルは、オゴデイの曾孫でカイドウのもとにあり、サルバンと同様、ナウルーズの娘を娶っている。そしてなんと、『ガザンの吉祥なる歴史』の改訂作業中——1306 年以降の一時期²⁰⁾、かれの父の名をアジキとする誤解が生じていた²¹⁾。

もうひとりの副使アーナンダがこのオルク・テムルの兄弟だったなら、もはやドゥアの使節團というより、チャバルと立場を異にするオゴデイ家の使節團、それもフレグ・ウルスにとっては全員が因縁の相手たちとなってしまう、友好には程遠い。おそらくこの誤解の原因は、チャガタイ家のアジキにオルクとオルク・テムルという息子がいたからである。しかも、『ガザンの吉祥なる歴史』の改訂作業時に、アジキの息子たちから、このオルク・テムルの名を削除しているのである²²⁾ (アジキは、クビライがアリク・ブケとカアン位を争ったさい、オゴデイ家のカダアン等とともにいちやく旗幟を鮮明にした²³⁾。そのごくビライから大軍を任されて、安西王アーナンダ、同じくチャガタイ家のチュベイ等とともに、オゴデイ家のカイドゥ、チャガタイ家のドゥアおよびアリク・ブケ家の諸王等の連合軍に對峙、ビシュ・バリク周邊から西北戦線にかけての站赤の建設・管理をしていた。寧夏府路下の山丹州や太原路の投下領の収益や巨額の“歲賜”・臨時見舞金を享受し、^{オルトク}幹脱に貸し付けていたことでも知られる²⁴⁾。これは、アジキの息子自體がフレグ・ウルスで有名になっていないと起こりえない事態である。また、大元ウルスにいるアジキが、息子のひとりに、ながらく共同戦線を張っている安西王アーナンダにあやかた名をつけていた可能性はじゅうぶんにある(ちなみに、安西王の息子はオルク・テムルといい、『ガザンの吉祥なる歴史』にも言及がある)²⁵⁾、その息子が、成宗^{カアン}テムル皇帝ではなくドゥアの代理として、フレグ・ウルスに使いしていた——これが事実であれば、東西に分裂していたチャガタイ家²⁶⁾は、この時點でまさに再融合の動きを見せていたことになる。チャガタイ・ウルスの領域の最西端からサルバン、最東端からアーナンダを選んだとすれば、ドゥアの意圖も理解しやすい。

そこで、次節ではその眞偽の検討の材料として、アジキの名が再び登場する『オルジェイトゥ史』の712A.H 條後半部の翻譯を提示する(『集史續編』は固有名詞や文意の讀みとりには有用なので、特に留意すべき大きな異同や補足については、[]に入れて記す)。フレグ・ウルスの史官がほかのウルスのモンゴル諸王の情報をどのように収集・處理していたのか、比較し総合的に見ることができるように、また『オルジェイトゥ史』という書物自體の體裁・性格を考えるために、前後の記事も纏めて掲載する。各ウルスのモンゴル諸王については、可能な限り初出の箇所に註を附し、大きく2系統に分類される『ガザンの吉祥なる歴史』の諸寫本の記述を併記・紹介する。ここに見られる異同こそ、情報収集の過程の一端を示すものにほかならないからである。紙幅の制限があるため、本稿ではその作業までにとどめざるをえないが、別の機會に、この712A.H 條について、『ヴァッサーフ史』の記述等と比較しながら詳細に解説し、『オルジェイトゥ史』の2つのアジキの記事のあいだに挟まれた約10年の中央アジアの情勢を眺め、ひいてはフレグ・ウルスの歴史書編纂を見直してみたい。

2. 『オルジェイトゥ史』 A. H. 712 條²⁷⁾

續いて [712A. H] 12 月 10 日の日曜日 (1313 年 4 月 8 日), [脱脫^{トクトア}／脱脫^{トクタ}]・寶位^{ウズベク}・王冠^{カン}の繼承者たる朮赤^{ジョチ}の國^{ウルス}・欽察^{キプチャク}帽^{ゲン}の諸城鎮^{バイナル}の君主 (=汗), šahzādah Ūzbik 月即伯^{バイ} (月思別^{バイ}／月祖伯^{ブカ}) 王^{エルチ}／太子^{エルチ}²⁸⁾の elči 使臣^{エルチ}たちが, 先導^{エルチ}の Kūk-Timūr kūrkan<Kök-Tāmūr güregen 闊帖木兒^{キョク テ ム ル ギュレ}駙馬^{ゲン}・Baināl 伯納^{バイ ナル}／伯亦難^{バイ ナル}・[Bāi-Būqā<Bai-Buqa 拜不花^{バイ プ カ}／Tāi-Būqā 泰不花^{タイ プ カ}] とともに到着し, 突厥^{テュルク}の ud yil 丑年の節日^{テュルク}に aulgāmīši<Mon.a'ulja 拜見した。

ところで, 月即伯^{ウズベク}の紀傳^{ウズベク}・かれの最初の故事は以下の如くであった。脱脫^{トクトア}の治世の末に²⁹⁾, Hurdū<Ordo 幹兒朮^{オルダ}の息子(孫) Tūnīgi<Qoniči 火你赤^{コニチ} (火尼赤) が亡くなったが, かれには忘れ形見たる二人の息子が残っていた。年長の Bāyān<Bayan 伯顔^{バイヤン}と年少の MWMKQTAY<Mon. Mau-Mangqutai 馬兀^{マウ} (マウ^{マウ}) 忙忽台^{マングタイ}／Muskiquṭay 執謬人^{マングタイ}・冤屈抱く者^{マングタイ}³⁰⁾。父の繼承者たる伯顔^{バイヤン}が ulus 國^{ウルス} (國土) と čerig 軍^{チュリク} (軍馬) を擁していたが, 馬兀忙忽台^{マウマングタイ}がかれに背き, かれをば mulk 王國^{ウルス} ≡ 國 から敗走せしめ, かくて [脱脫^{トクトア}のもとに] 轉がり込んできた。脱脫^{トクトア}は血に飢えた大軍とともにかれの救援・救助に措置を下した。馬兀忙忽台^{マウマングタイ}は逃亡し, 父の座は再び伯顔^{バイヤン}に確定された。脱脫^{トクトア}は夏・灼熱の季節に歸還せんとし, 自己の甥, Tuğrik<Toγril 脱隣^{トグルル}の子月即伯^{ウズベク}を Kübluk<Köprük の兄弟 Aqšah<Üšanān³¹⁾とともに諸軍の頭に置き, 自身は出立の手綱を dār al-mulk 京師 (御座所)≡根脚の yurt 營盤^{ユルト} (=Mon.nuntuq) に向けた。行路の辛苦から, とある小疾がかれの健康に現れ, 病原が體質に勝った。かくて, 712A. H. の 4 月 4 日の水曜日 (1312 年 8 月 9 日), Saray の疆域へ, Atil (=ヴォルガ) 河を渡っていた船の中で逝去した。好き統治が積まれ, 迫害はほとんどなく, 辛抱する我慢強さが沈着・忍耐と共にあった [かの諸國は, かれの朝廷の時代に繁榮の極致に至り, かれの國^{ウルス}は財・富が集積された]。

そのご, 國^{ウルス}の amir 臣僚たち≡noyan 官人^{ノヤン}たちが [“即位” 一つに集まった／王權の問題について議論した]。諸王について, Saray の官人 Qutluğ-Timūr<Qutluğ-Tāmūr 忽都魯帖木兒^{クドテムル}が言ったものである。[「俺毎^{われら}は脱脫^{トクトア}の兒子^{ノヤン}³²⁾を汗位に推戴せん。何者^{カン}, 他的魯帖木兒^{クドテムル}が言ったものである。[俺毎^{われら}は脱脫^{トクトア}の兒子^{ノヤン}³²⁾を汗位に推戴せん。何者^{カン}, 他的父親^{いさおし}の勳功^{われらにたいし}は俺毎^{われら}根底^{いさおし}多いので有る。しかし, 『最初に月即伯^{ウズベク}を招き, 最良の方法で他を中央から排除せん (俺毎^{われら}は)』麼道, 文契を以てせん／汗位は脱脫^{トクトア}の兒子^{ノヤン}那的^{カン}毎^{トクトアの}に屬し着有る。しかし, 最初に須らく月即伯^{ウズベク}への企畫^{くわだて}を做す可し。何者^{カン}, 他は王國^{トクトアの}の敵^{かのものたち}で有る。自後^{よりのち}, 脱脫^{トクトア}の兒子^{ノヤン}を國^{ウルス}の寶位^{ウズベク}に即位^{ウズベク}せ教め也者 (俺毎^{われら}は)」と。これに一致した。月即伯^{トクトア}は脱脫^{トクトア}の生天 (死亡) の消息を聞いたので, 軍を残して慌ててやって來た。[ある人がか

れに背信棄義の^{ノヤン}官人たちの策略・陰謀・奸計を知らせた／臣僚たちの熟考・思案に氣づかなかった。やはり忽都魯帖木兒^{クトルクテムル}という名のある臣僚が月即伯^{ウズベク}にかれらの策略を知らせた]。

[(そもそもは) かれが臣僚たちに salām 平安の挨拶と imān 信仰の責を問わんとするがために、臣僚たちの領袖が言うには「唉、君よ、^{なんじ}あなたは俺毎根底木速魯蠻^{ムスルマン}たることでは無く、恭順・服従を要め者。怎生俺毎に Ġinkiz-hān 成吉思汗^{チンギスカン}の yasa=Mon.jasaq 扎撒・yosun^{ヨスン} 體例から、甚麼不平有り 聖法^{いかなる} 以て阿拉伯の長袍を召喚せ教む麼^{なんじ} (あなたは)?」と／臣僚たちの月即伯^{ウズベク}への敵意の原因は、月即伯^{ウズベク}が絶えずかれらに信仰の責と Islām をなさしめ、かれらにそれを熱心に勧めたことにあった。臣僚たちはかれの麻痺について言ったものだ。「^{なんじ}あなたは俺毎根底服従・從順を望者。你を教法・信仰と共に、俺毎は甚麼の勾當有らん。俺毎は怎生成吉思汗^{チンギスカン}の tōre 道理・yasaq 扎撒を放棄し着阿拉伯の教法に入る麼?」]。[月即伯はかれを (199a) 殺した。ほかの臣僚たち^{ノヤン}官人たちは、かれの (イスラーム法では) 行わない方が望ましいが不法ではない行為について恐れ慄き憎悪し／かれはこの意義に固執し、かれらはかれについてこの事由以て恐れ慄き憎悪し]、かれの生命^{いのち}への企圖^{くわだて}以て gāngās 商量・一致したのだった。宴^{うたげ}の最中にかれの勾當^{こと}を始末するべく、招待した。月即伯は toy 祝延に出席した。二・三の紅紫の杯を歌曲の伴奏で飲んでしていると、[ある臣僚／忽都魯帖木兒^{クトルクテムル}] がかれの起立に目くばせで合圖した。月即伯は疑念を抱きつつ、厠^{かわや}に起ち、用を足した。かの臣僚がかれの後を追ってきて、臣僚たちの陰謀・奸計の策略をありのままかれに述べた。月即伯^{ウズベク}は直ちにその足を駿馬に乗せて逃げ、數千人を自身のもとにかき集め、かれらの氣力・援助によって歸還した。そしてかれらへの企畫^{くわだて}以て機先を制した。臣僚たちの全てを [100 餘りの諸王／成吉思汗^{チンギスカン}の子孫^{ウルク}に屬する 120 の諸王^{トクトア}]・脱脫の息子とともに捕え殺した。いっぽうで、かの臣僚を慰撫・照顧し、自身の諸祕密の語り部・顧問・親信にした。[かれは、長期間に亘って 欽察草原・Hwārazm 花刺子模^{ホラスム}の諸城鎮において統治をなした、かの忽都魯帖木兒^{クトルクテムル}である]。かくて [自らは／月即伯は]、[朮赤汗^{ジョチカン}の] 國^{ウルス}の王座に即位し、自身の登極の吉報を以て使臣たちを諸國周邊・四方八方に遣わしたのだった。[月即伯は姿・性質・教法の賜りものたるあらゆる才藝を有し、木速魯蠻^{ムスルマン}の力を以て、慈善事業に關わる王／太子だったのである]

この時期、Dūa^{ドゥア} 篤哇の息子 Īsin-Būqā>Äsān/Esen-Buqa^{エセンブカ} 也先不花³³⁾ は、qān<qā'an^{カアン} 皇帝と敵になっており³⁴⁾、後尾から何人かがかれへの企畫^{くわだて}をなさぬよう、月即伯^{ウズベク}がかれと友・良好たらんことを願っていた。そこで、かれに「皇帝は『月即伯は汗位に相應しくも君主に適當でも無い。朮赤汗^{ジョチカン}の位次・脱脫^{トクトア}の位階は、別の太子に委付せんこと討求す (俺は)』麼道、宣し着有る也」との信書 (宣託) を送った。月即伯はこの棘ある話から皇帝^{カアン}に對し反逆者・敵となった³⁵⁾。

側近・inaq^{イナク}倚納^{（＝親信／寵信の的）}であった例の臣僚^{クトルクテムル}〔忽都魯帖木兒〕が月即伯に謂うには「若し（^{あなた}您）が）^{あなた}我の評決・同意、^{あなた}我との商議以て^{こと}勾當を^{なら}做さんこと討求する呵、^{カアン}皇帝と敵たるを^や休められ者。何^よ者、^{なんとなれば}他は創造主（≡上天）の福蔭^{うち}の裏に有る。他へのil^{かれ}歸附・服従・歸順を以て^{あなた}您是^{ウルス}國の全てに統治・支配が可能に成る也者。長生に諸々の災禍・疫病・不幸・敵襲から庇護され、安祥で有る也者（^{あなた}您は）。^{エセンブカ}也先不花・Ġagātāi < Ġa'adai^{チャガタイ}察合台の^{ウルク}uruq子孫との友愛・歸順の放棄を説われ者（^{あなた}您是）」と。月即伯は聰明^{ゆえ}さの故に^{あなた}かれの判断を選択し、也先不花の訓告・約會は無効・空虚となり、^{カアン}かれらの同盟は放棄された。かくて、冬の真ん中に、和解・和平の道について、^{エルチ}皇帝の御前に急遽の使臣たちを差し向けた³⁶⁾。

かれらの歸還の後、同様に^{エルチ}使臣たちを友愛・協調・和平以て Ülgäitü Sultān < Ōljeitü soltan^{オルジェイトゥスルタン} 完者 都算灘（鎮潭＝王／汗）の御許に遣わした。716A. H. の6月10日（1316年8月30日）→ 712A. H. の6月10日（1312年10月13日）／ 712A. H. の12月10日（1313年4月8日）付けを以て、（199b）欽察^{キプチャク}のDarband^{ダルバンド}達耳班^{ウラウ}の道からGurgistan^{スルターニーヤ}の田地（邦土）を経由して、50匹の^{ウラウ}ulaq^{スルターニーヤ}鋪馬と共にSultāniyyah^{スルターニーヤ}孫丹尼牙に到着した。信書（宣託）の内容は、以下の如くであった。「^{なんじ}你は^{あに}aqā^{われ}哥哥、^{おとうと}俺は^{われら}ini^{おとうと}兄弟、俺毎の間には協調〔・友愛〕の慣習が行踏し着有る。若し^{チェリク}軍を必要とし着有る呵、不揀^{だう}甚麼討求であっても派遣する也者（俺毎は）。但し、Īrān zamīn^{メン}國土の諸城鎮・諸州に據いて、Mangū-Qān < Mānggū qā'an^{カアン}蒙古皇帝（＝蒙哥）の^{モンケ}yarliq^{ジャリク}（＝Mon.jarliq）聖旨の敕命を以て俺毎の^{われら}haqq報酬／權利で有る^{もの}的は^{いかなる}不揀甚麼物件であっても俺毎の人毎に付與せ者。然れば、不通の諸路は開かれ、^{うち}共々に^{てい}堆積混亂の裡に腐り朽ち着有る^{ところの}的^{だう}並びに^{われら}兩方面からそれが^{たち}必要で有る^{ところの}的^{だう}雙方の諸の商品・布帛を相互に送付する也者（←俺毎は）。亦た^{たち}商賈毎、^{たち}隊商毎が^{だう}利益の爲に^{スルタン}往來する也者」と^{エルチ}と³⁷⁾。算灘は使臣たちに、^{エルチ}求情・siürgāmišī < Mon. soyurqa-^{エルチ}賞賜／恩賜・慰撫の後、放棄の裁可を與えられた。

712A. H. の〔巡禮月〕12月15日の金曜日（1313年4月13日）、[Isma'il^{イスマイール} 亦思馬因 派／Šām] の狂信者たちが^{ミスル}Miṣr^{ナースイル}迷思耳の^{ナースイル}Nāṣir^{ナースイル}納昔兒の命令を以て^{イトクリ}İtqūli < Īt-qulī^{イトクリ}亦都忽立を刀で刺し、即死した。この歳に、^{ミスル}迷思耳の^{ナースイル}跛子の^{ナースイル}納昔兒は^{ナースイル}軍勢と共にHalab^{ハラブ}アレppo・Furāt^{フラーテス}ユーフラテス河の沿岸に來たった。[Diyārbakr^{ディヤルバクル}の管理者であった] 臣僚の^{スタイ}Sūtāi < Sutai^{スタイ}速台は^{スタイ}機会をつかみ、^{スタイ}かれの兵士たち全員を切らせ、^{スタイ}かれらの糧食を略奪した。

712A. H. の巡禮月12月17日の日曜日（1313年4月15日）、[神に保護されたる^{スルターニーヤ}孫丹尼牙での^ヤyāilāmišī^{オルジェイトゥスルタン}駐夏の意圖以て／移動せる吉祥の諸旗の騎（完者 都算灘）は^{スルターニーヤ}qışlāmišī^{オルド}駐冬>駐夏の意圖以て^{スルターニーヤ}孫丹尼牙方面に動いた。] 諸^{スルタン}ordo^{オルド}斡魯朶（＝宮帳）の後方より^{スルタン}hwā-

ğah Tāğ al-Dīn ‘Alīšāh ^{ホージャタージュウッディーン ア リーシャー}火者答朮 丁 阿里沙の追従。12月28日の水曜日(4月26日)、福廕の諸旗が Hamadān は Sultān-ābād の kūšk 涼亭への到着。この日、Pulād Čingsāng/Fulād Čingsāng<Bolad/Bolod ^{ボラド}孛羅丞相が Arrān の草原にて qışlāq ^{ユルト}住冬の營盤に死去した。

ところで、^{エセンブ カ}紀傳・^{チャ ガ タイ ウルス}察合台の國におけるかれの統治は以下の如くであった。

Künčāk ^{コンチュク}寬徹(寛闊／款徹)³⁸⁾の不可避の諸状況・逝去の後、かれの座に Čagādāi ^{チャ ガ}察合台の子 Qadāqī<Qadaqī/Qadagi ^{カ ダ キ}合答吉の子息 Nāliqū ^{ナ リ ク}納里忽——その母は Turkān < Türken ^{トゥルクエン}忒里蹇, Kirmān ^{キ ル マン}乞里茫の Sultān Rukn al-Dīn の娘であった——が据えられた。‘Alī uğūl ^{ア リー オグル}阿里大王[と]兄の Dū al-Qarnain —— Dūā ^{ドゥア}篤哇の ḥašš≡emcū 梯己の ṣāhib 司であった——は、二人とも納里忽の甥であった。篤哇の子孫は、かれの地位に對して、打ち碎かれ・望みを斷たれ・抑え込まれた。^{チャ ガ タイ}察合台の子 Būrī ^{ブ リ}不里の子 Aḡīqī oḡul ^{ア ジ キ}阿只吉太王の息子 Ūruk<Öruk ^{オルク}月魯は、かれに反抗し言った。「篤哇的兒子毎の地位根底、^{にたいし}別人を他毎の座次・^{ウルス}國の君主に在ら教むるとは、^{いかに}怎生相應ならん? 清河の有るにも^{かわらず}盡管、墓土を以て tayammum 代淨が許されよう麼?」。月魯大王がかれの座に定められた。納里忽は知るや、騎乗の隨從たちとともに前去し、(200a) 月魯を捕え、直ちに殺害した³⁹⁾。敵どもに勝利・凱旋し、^{ドゥア ウルク}篤哇の子孫について用心深くなり、政府の親信たち^{アイナク}≡側近たちに「俺毎的諸州≡^{われらの}國の利益たる策は、是れ、^{ドゥア ウルク}篤哇的 ūrūg<uruq 子孫／a’uruq 老小營を完全に撲滅し、^{かれらの}他毎の後裔を途絶・斷絶せしむ^{こと}(←俺毎が)の裡^{うち}に有る也」とて相談した。顧問の臣僚たちの1人、Baḥšiyār ^{アイナク}の子親信の Kirāi ^{ケレイ}怯來は直ちに^{ドゥア}篤哇の最年少の息子の Kebek ^{ケベク}怯別に「自己を納里忽の危害から守^れ者。塗抹の企圖^{くわだて}以て^{ドゥア}篤哇的^{ドゥア}毎都を狙撃し・隙を窺^{てい}つ着有る也」とて警告した。怯別は驚愕・茫然自失したまま、その恐怖・畏懼・害怕・絶望から Ūzun Bahādur<Uzun ba’atur の房に入って涙し、呻き、不吉なる運命の時・審判の日々の抹殺に對し、助け・庇護を求め、Uzun の下肢を掴み、企圖の状況・納里忽の事案を述べ立てた。Uzun ba’atur はかれに同情し、かれへの助力・敵たちの無力化を以て「高潔な魂が體軀の裏に流れ巡^{うち}つ着有る限り、Kūbak<Köpek ^{ケベク}怯別の援助者・支持者で有る」との嚴肅なる誓いを飲んだ。そしてかれと「我は梯己の百騎と一同に、^{ケベク}怯別と他的兄弟の Abūkān<Ebügen ^{エブゲン}也不干は二百騎と一同に敵たちの撃退に參集、狙撃すべし」とて、gāngāš ^{そうだん}商量した。Uzun ba’atur が説うには「matars ^な休恐れ者。maharās ^そ憂うること勿れ⁴⁰⁾。明日、納里忽的祝延を以て、中間・間隙の裏^{うち}に乗じ^よ者、我が好機^{トイ}に祝延から出で來よう。敵毎^{たち}が^{それ}的に耽溺する時分に、^{あなた}您は納里忽的幹魯朶の四方従^より諸火を點け^よ者。俺毎は三百の nōkōr ^{ノコル}伴當と一同に迅速に敵毎^{たち}を打^ぞとう也、都撲滅しよう也」と。(かれらは)斯様に倣^なして、寢臺の上で泥酔した

ナリクに勝利し、ノコルたち・息子たち諸共に殺した。有能でかれを王座に坐せしめた厭わしき大臣も殺害した。臣僚たち・軍勢たちはその面を Kūbak 怯別に向け、察合台の國の統治権は、刀傷以てかれの上に確定・委託された。

三日後、相次ぐ敵の來襲の消息—— Kiük<Güyük 貴由の息子 Tügmā<Tügme 禿苦滅(禿麥)⁴¹⁾と Ġabār 察八兒太子(王)⁴²⁾が三十萬の軍とともに怯別の生命を狙い至りつつあること——が知らされた。怯別は自身の兵士たちとともに Quyās<Qunās⁴³⁾の宿頓から出發し、TWYRMAY に安下した。かの陣地において、禿苦滅と察八兒は軍團の yāsāmiši<Mon.jasa 整治を做して、怯別を攻撃した。雙方より苛烈な戦闘・緊迫した交戦が進行した。怯別は潰走・退却し、かれの軍は四方八方に散った。Dū al-Qarnain の弟阿里大王が大軍と共に Ūzkand 兀思干にあり、(200b) 千戸の軍官 Araq 阿剌と二人とも各々自身の軍團と共に怯別の援助を以て連合した。Mubārak-sāh 木八剌沙の息子(孫) Šaiḥ Timūr も^[補2]、自身の軍團とともに援助・援護を示し、一緒に禿苦滅の背後に前赴した。兩勢は Qunās に於いて遭遇した。期せざる邂逅の後、戦闘になった。禿苦滅は潰走し、Qalāūz<Qala'un/Qalawun 合剌溫と共に Turkistān 途魯吉の地の諸城鎮に入り、脱脱の il 仲間となった。怯別は一千騎を選び、禿苦滅の追跡に遣わした。冬の季節に禿苦滅に追いつき、かれを捕獲し、殺した。春に歸還した。

まさにこの時期に、Haisānk<Qaišan 海山太子(=武宗)を以て政權交替に及んでおり、皇帝の國の王座に確立・安住し、察八兒に信書を付與して、かれに對し分配の施恵・恩恵・siürgāmiši 賞賜各種を以て命じ、「他的兄弟毎の主・頭に在る教め者」とて、父の座をかれに委付した。察八兒は七千騎と一千五百匹の鋪馬ともども、兄弟 Yangičār<Yangičār 仰吉察兒⁴⁴⁾と一緒に皇帝の御前に出立した(=入覲)。皇帝はかれの娘たちを臣僚たちに與え、后妃たちには自身の諸營盤に對して離去・收回の批准を與えた⁴⁵⁾。

いっぽう、怯別は Pūlād kūrkān<güregen 孛羅駙馬を書翰以て皇帝の宮廷に遣わした。奏するには「納里忽は俺毎の父親の位階を強奪・横領して着有來。俺は大なる上天の氣力の裏に、皇帝の福蔭の裏に、他から奪取し來也。亦た禿苦滅も敵・叛逆者と做つ來の上頭、除去し來也。今自り以後、皇帝根底氣力を添えることを請い願う(俺は)」と。皇帝は、それを嘉し、かれに siürgāmiši 賞賜を命じた。

察合台の諸州の實位は、怯別に落ち着き、かれへの援助・援護を命懸けで做して前赴していた阿里大王に婚姻を準備して丁重に慰撫し、Hutan 斡端(忽炭)の地土の諸州・統治をかれに授け、途魯吉の地の疆域全てをかれの判断・才覺次第となした。七つの yam (=Mon.jam) 站を通過してしまった後に、かれの踪跡に對して騎乗の隨從たちが差し向けられ、結果、かれは道半ばに伴當たち諸共、卑劣・殘酷に殺され、路の塵埃の上に投棄された。何者、大膽不敵な丈夫、ba'atur 拔都兒≡勇士であつたが故に、かれ

の叛亂・bulṡaq^{ブルガク}内亂を恐れたのだった。

怯別は國の寶位を解き放ち磨き淨め、Negüder^{ネグデル}捏苦迭而（納忽答兒）たちの集團および Hindustān^{ヒンドゥ}（忻都田地）の疆界に對して知事・長官だった長兄の也先不花の根前に、「諸州の寶位・王冠は諸々の混濁の瑕疵根底磨き淨め來也（俺は）。(201a) 敵毎を都打ち倒し來也（俺は）。王座を您的爲に掌握・解放し來也（俺は）。隨即に日を夜〔までと／と共に〕説わず、面を政府の tahtgāh 御座所（都）に向けるべし。好久的期間、寶位と王冠が伴當と主上無く残つ着有る^{ノコル} 的^{てい}の^{ところの}軍と國を識者^{チェリク}」とて、吉報を交えた信書を送った。也先不花は、この吉報の喜訊によって、與えられし生命を、吹かれ飛びゆく浮世の身より歡喜・興奮に震えんとて願った。最年少の弟 Īt-qūl<Īt-qol/It-qol に自身の座を以て捏苦迭而たちの頭^{ネグデル}に据えて、Bini-yi gāu（牛の鼻）^{かしら}⁴⁶⁾の營盤から阿母河の方角に、面を察合台^{エセンブカ}の御座所・Qunās に向け、稻妻・流星のように、遷移に遷移、前去し續けた。政府本部の疆域に到着すると、怯別は直ちに政府の柱石たちとともに、かれを出迎えた。對面にあたっては、成吉思汗^{チンギスカン}の^{ウルク}子孫の^{もろもろ}諸の慣習・體例の如く、みな帽を頭から脱ぎ、帶を項に架け、也先不花大王を王國^{エセンブカ}國^{ウルス}の寶位に即位させた。かれは王國の寶位に確立すると、弟怯別を Fargānah の諸州・Mā warā' al-nahr の田地（邦土）の守護、さらには Kiš^{ケシュ}碣石と Naḡṣab^{ナフシャブ}那黑沙不の疆域に遣わした。ちなみに、暴動・叛亂・内亂の時まで、かれはかの疆域にて yāilāmīši 駐夏をなしていたのだった。

ほかに、この歳の數箇月、臣僚の [Tarmatas/Tarmatāz]^{ダルマタス}答里麻塔思が Rūm の田地に派遣されたが、Qunqūrtai<Qonqoltai^{コンコルタイ}晃火兒台の息子 Qūrumīši<Qurumši^{クルムシ}忽林失——暴燥・憤怒・錯亂がかれの行動を制壓・支配しており、かれの營盤^{ユルト}は Rūm 諸國の疆域に屬する Mūš の地土の宿頓に在った——が高官たる四子とともに扎撒^{ジャサク}の救命^{うち}の裏に入らせ交め被れ來たためである。712A. H. 5 月（1312 年 9 月 4 日～10 月 3 日）に歸還した。

附 記

本稿は、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 C）19K00939「東西資料からみたモンゴル、ポスト・モンゴル時代の軍事と外交」による研究成果の一部である。

註

- 1) 『元史』卷一二〇「札八兒火者傳」
- 2) 『元史』卷二十一「成宗本紀四」“[大德十年三月（1306 年 4 月 14 日～5 月 12 日）乙未] 給千家木思答伯部糧三月”は、あるいは歸還後の慰勞金かもしれない。

3) 原文は、

اسامی ایلچیان قان : تماچی از سلدوس و تورچیان از قوم جلال و مصطفی خواجه از نسل جعفر خواجه
اسامی ایلچیان چاپار : ایستمنور از نژاد جلالیر و نام اصلی او جعفر ست و اورس بهادر از هزاره قاوغتای
اسامی ایلچیان دوا : ساربان مانغلی [و] تیمور پسر ابوکان [و] آننده پسر اجیقی

となっている。後掲註 6 に挙げる校訂本・翻譯では、“察八兒の使臣たちの名は、① 札刺兒一門の也先帖木兒で、かれの本來の名は Ġāfar である ② Qāvgatāi 千戸に屬する Ūrus bahādur 斡羅思拔都兒”と解するが、そうであるなら *ایستمنور* の後に關係代名詞の *که* を置いて説明するのが普通ではなからうか。 *و* と *نم* の間にはんらい別の人名と *که* があった、すなわち“小名が Ġāfar である □□” だった可能性もある。土哇の使臣たちについては 2 箇所 *و* が脱落している。あるいは、カーシャーニーの自筆原稿では *و* は書かれておらず、代わりにそれぞれ空格・本名を確認して記入するための空欄が設けられていたのかもしれない。いずれにせよ、皇帝および土哇の使臣たちの列挙法からすると、ここの箇所は不自然である。

- 4) ウイグル文字では TOOA と綴られる。漢字音からすればドウワと讀む可能性が高いが、TOWA とは記していないので、ドゥアと表記する。Geng Shimin et James Hamilton, L'inscription Ouïgoure de la stèle commemorative des Iduq Qut de Qoço, *Turcica*, Tome 18, 1981, 亦隣眞「至正二十二年蒙古文追封西寧王忻都碑」(『中國民族古文字研究會第二次學術討論會論文』1983 年 10 月 のち『亦隣眞蒙古學文集』內蒙古人民出版社 2001 年 pp. 627-746. に收録)。
- 5) ほかの箇所では, manqlāi と綴られることが多い。
- 6) Abū'l-Qāsim 'Abd-Allāh bn. Muḥammad al-Qāshānī, *Tārīḥ-i Ūljāitū Sultān*, MS: Istanbul, Süleymaniye kütüphanesi, Ayasofya 3019/3, f. 150a, f. 154a, f. 154b, MS: Paris, BnF, suppl. persan 1419, f. 21b, f. 28b, M. Hamblī (ed), *Tārīḥ-i Ūljāitū*, Tehrān, 1969, pp. 31-32, pp. 41-42, M. Parvisi-Beger, *Die Chronik des Qāshānī über den Ilchan Ūlgāitū (1304-1316): Edition und kommentierte Übersetzung*, Göttingen, 1968, p. 39, pp. 48-49, text, p. 31, pp. 42-43.
- 7) 國事に參與していた宰相ラシードウッディーンには有り得ない過失である。『ガザンの吉祥なる歴史』の「ガザン・カン紀」の記事(イスタンブル本系統のテキストでは、即位後の記事からは、イスラームへの入信との関係で、あえてテュルク・モンゴル暦を附していないかった。ここでカーシャーニーが形式的に復活させていることは、『集史』第二部のみならず第一部も自身の著述だと主張したいがための、證據づくりにも見える。なお、カイドウの死も、『ガザンの吉祥なる歴史』やジャマール・カルシーの『明解辭典補遺』の記述より一年遅くなっている。宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』(名古屋大學出版會 2018 年 pp. 939-940.)
- 8) *Ḍail-i Ġāmi' al-Tavārīḥ*, MS: Paris, BnF, suppl. persan 209, f. 443a-483b, MS: Istanbul, Nur-Osmaniye 3271, f. 1b-38a.
- 9) *Ḍail-i Ġāmi' al-Tavārīḥ*, MS: Paris, f. 447b. l. 1-11, MS: Istanbul, f. 5a. l. 18-f. 5b. l. 1-2.
- 10) Rashid al-Dīn Fazl-Allāh Hamadānī, *Majmū'ah-yi Rashīdīyah (Mabāḥith-i Sulṭānīyah)*, MS: Istanbul, Nur-Osmaniye 3415, f. 117a-146a, MS: Iran, Gulistan Palace 2235, f. 170b-175b. 『モンゴル時代の「知」の東西』 p. 609.
- 11) A. Mostaert & F. W. Cleaves, *Les lettres de 1289 et 1305 des Ilkhan Arṛun et Ūljeitū à Philippe le Bel*, Harvard-Yenching Institute, 1962, pp. 55-56, planche VII-XII
- 12) *Tārīḥ-i Ūljāitū Sultān*, MS: Istanbul, f. 151b-152a, MS: Paris, f. 24a, *Tārīḥ-i Ūljāitū*, p. 35, *Die Chronik des Qāshānī über den Ilchan Ūlgāitū (1304-1316)*, p. 42, text, p. 35.
- 13) Shihāb al-Dīn 'Abd-Allāh Sharaf Shīrāzī, *Tajziyat al-Amṣār wa Tazjiyat al-A'sār*, (*Tārīḥ-i*

Vaṣṣāf), Bombay, p. 509, MS: Istanbul, Nur-osmaniye3207, f. 194b. ちなみに、杉山正明「ふたつのチャガタイ家」(『明清時代の政治と社会』1983年)のち『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会 2004年 pp.288-333.に収録)のp.308に引用される『ヴァッサーフ史』は、正しくは“Činggiz-qanの後裔のうち、Būriの曾孫、Aḥmadの孫、Šadiの子たる Türe oġul”である。

Šu‘ab-i Paṅġānah, MS: Istanbul, Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Ahmet 2937, f. 104a./Mu‘izz al-Ansāb, MS: Paris, BnF, Ancien fond Persan67, f. 9a-11b.

Yisūkāi-Bahādūr — Ğüci-Qāsār — Bāqah — **Abkān** ^{エ フ ゲン} 也 不 干 — **Timūr** ^{テ ム ル} 帖 木 兒 · **Bābā-bahādūr** ^{バ バ バ ア ト ル} 八 八 拔 都 兒

Hāfiz Abrū, *Zubdat al-Tavāriḥ-i Bāysunguri*, MS: Istanbul, Fatif4370/1, f. 21a.

イエスゲイ・バアトル(チンギス・カン之父だった)の子ジョチ・カサルの子Baġadの子AMKAN<Emegen ^{エ メ ゲン} 也 滅 干 子 ANWKAN< ^{エ フ ゲン} 也 不 干 子 ^{バ バ バ ア ト ル} 八 八 拔 都 兒 子 Sūdāi<Sutai ^{タイ} 速 台 子 Tuġa-timūr<Tuqa-temūr ^{ト カ テ ム ル} 脱 哈 帖 木 兒 子 pādšāh ^{カン} 君主/汗の名號が與えられていた。

- 14) *Ġāmi’ al-Tavāriḥ*, MS: Paris, BnF, suppl. persan209, f. 174b, MS: Istanbul, Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Revan1518, f. 136a, f. 138a, MS: Taškent, Abū Rayhun Birūni Institute of Oriental Studies, 1620, f. 107b, f. 109b.
- 15) *Tāriḥ-i Ūljāitū Sultān*, MS: Istanbul, f. 159b, MS: Paris, f. 37a, *Tāriḥ-i Ūljāitū*, p. 54, *Die Chronik des Qāšāni über den Ilchan Ūlġāitū (1304-1316)*, p. 58, text, p. 54. *Dail-i Ġāmi’ al-Tavāriḥ*, MS: Paris, f. 450a, MS: Istanbul, f. 7b.
- 16) *Ġāmi’ al-Tavāriḥ*, MS: Paris, f. 174b, MS: Istanbul, f. 136a, f. 138a, MS: Taškent, f. 107b, f. 109b.
- 17) *Ġāmi’ al-Tavāriḥ*, MS: Istanbul, f. 273b, MS: Taškent, f. 246a.
- 18) *Ġāmi’ al-Tavāriḥ*, MS: Paris, f. 337b, MS: Istanbul, f. 272a, MS: Taškent, f. 244b.
- 19) *Ġāmi’ al-Tavāriḥ*, MS: Rampur, Raza Library, 2015, p. 52, St. Petersburg, PNS46, f. 111a.

^{チャ ガ タイ} 察 合 台 の 第 8 子 ^{サルバン} 撒 兒 蠻: かれにはふたりの息子があつた。Qūšiqai · Nikbāi.

Ġāmi’ al-Tavāriḥ, MS: Paris, f. 212b, MS: Istanbul, f. 170a, f. 171b, MS: Taškent, f. 142a.

^{チャ ガ タイ} 察 合 台 の 第 4 子 ^{サルバン} 撒 兒 蠻: かれにはふたりの息子がいる。[かれらの名前は] Qūšiqai · Nikbāi.

Šu‘ab-i Paṅġānah, f. 121b, *Mu‘izz al-Ansāb*, MS: Paris, f. 36b.

Ġinkiz ḥān/Ġinkiz ḥān — Ġādāi ḥān/Ġāḡatāi ḥān — Sārbān — Nikbai

Ġāmi’ al-Tavāriḥ, MS: Rampur, p. 59, St. Petersburg, f. 113b, MS: London, BL, 16688, f. 17b, MS: Paris, f. 216b, MS: Istanbul, f. 174b, MS: Taškent, f. 145a.

Balāq ^{バラク} 八 刺 の 死 後, [^{チャ ガ タイ} 察 合 台 / か の] ^{ウルス} 國 の 統 治 權 は, かれの從兄弟, [^{サルバン} 撒 兒 蠻 / ^{サルマン} 撒 兒 蠻] の子 ^{ネ グ ベイ} の **Nikbai** 捏 古 伯 に 與 え ら れ た。三 年 間, ^{バードシャー} 君 主 (≡ 汗) で あ っ た。そ の ご, ^{チャ ガ タイ} 察 合 台 の 第 7 子 で あ っ た Qadāqī^{*} の 息 子 の Būqā-Timūr ^{フ カ テ ム ル} 不 花 帖 木 兒 に 與 え ら れ, し ば ら く 君 主 で あ っ た が, 脱 毛 症 に 苦 し む こ と と な っ た。か れ の 全 て の 髪 ・ 鬚 が 抜 け, そ の 疾 病 の 裡 に 身 罷 っ た。か れ の 後 は, 海 都 が か の 國 の 統 治 權 を 八 刺 の 息 子 の Dūa ^{ドゥ ア} 都 瓦 に 與 え た。そ し て 現 在, か れ が 居 る が, 昨 年 [A.H. 610 年], 海 都 と 一 緒 に, 皇 帝 の 軍 勢 と の 戦 闘 裡 に 傷 を 喰 ら っ た た め に, 病 氣 ・ 虚 弱 で あ る。海 都 は そ の 傷 に よ っ て [死 ん だ / 亡 っ た]。か た や 都 瓦 は そ れ か ら 病 氣 [が 續 い た が / と な っ た が], [そ の] ^{バードシャー} davā 治 療 が で き な っ た。[平 安 ア レ]

※イスタンブル本, タシユケント本はQadāqīをチャガタイの第7子の欄から消しておきながら, ここの箇所を訂正するのを忘れている。註39参照。

20) 『モンゴル時代の「知」の東西』 p. 942.

21) *Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Paris, suppl. persan209, f. 175b, MS: Paris, suppl. persan1113, f. 132a.
 [Ūktāi 窩闊台皇帝の第6子 Qadān ugūl 合丹大王の子] ④ *Yayah* 爺爺^{イエイエ}：かれも海都^{カイドゥ}の随從であつた。2人の息子をもうけていた。(1) *Urūk-Tīmūr* 月魯帖木兒^{オルクテムル} (2) *Īs-Tīmūr*。この月魯帖木兒は[を]、海都^{カイドゥ}を[は] *Ḥurāsān* の境界に派遣していた。ナウルーズが逃亡してかの方面に[あつた]時分、^{オルクテムル}月魯帖木兒と一緒にいて、自身の娘をかれに與えた…11人の息子をもうけていた。*Kūrasibah* 曲列失伯^{クレシベ}・*Tūqlūq-Būqā*・*Qūtlūq-Ḥwāgah*・*Būlūq-Tīmūr*・*Abāci*・*Kūchah-Tīmūr*・*Ġin-Tīmūr*・*Ġin-Bulād*・*Algūn*・*Muḥammad*・*‘Alī*…

Ġāmi' al-Tavāriḥ, MS: Istanbul, f. 136b-137a, f. 138b, MS: Taškent, f. 108a-108b, f. 110a.
 [Ūktāi 窩闊台皇帝の第6子 Qadān ugūl 合丹大王の子] ④ *Yayah* 爺爺^{イエイエ}：かれも海都^{カイドゥ}の随從であつた。2人の息子をもうけていた。(1) *Urūk-Tīmūr* 月魯帖木兒^{オルクテムル} (2) *Īsī-Tīmūr*…
 ⑦ *Āḡiqi* 阿只吉^{アジキ}：月魯帖木兒^{オルクテムル}という名の1人の息子をもうけた。この月魯帖木兒を、海都^{カイドゥ}は *Ḥurāsān* の境界に派遣していた。臣僚^{ノヤン}(= 官人)のナウルーズが逃亡して河の向こう側に^い去つた時分、^{オルクテムル}月魯帖木兒と一緒にいて、自身の娘をかれに與えた…11人の息子をもうけていた。順序は以下のとおり。*Kūrasbah*・*Tūqlūq-Būqā*・*Qūtlūq-Ḥwāgah*・*Qutluḡ-Tīmūr*・*Ābāci*・*Kūchah-Tīmūr*・*Ġib-Tīmūr*・*Ġin-Bulād*・*Algūn*・*Muḥammad*・*‘Alī**…
 ※系圖では、^{アジキ}阿只吉の子は^{オルク}月魯となっており、11人の息子は古い情報すなわち^{イエイエ}爺爺—^{オルク}月魯帖木兒—に繋げたままである。

Šu‘ab-i Panggānah, f. 127a, *Mu‘izz al-Ansāb*, MS: Paris, f. 42b.

Činggiz hān/Čingiz hān—Ūkdai hān/Ūkdai Qāan—Qadāqān ugūl/Qadān ugūl—*Yāyah/Yayah*—*Urūk-Tīmūr/Urūk-Tīmūr*

^{アジキ}阿只吉と^{オルクテムル}月魯帖木兒の父子の情報は記入されていない。誤情報だと認識したからだろう。

Tārīḥ-i Ūljāitū Sultān, MS: Istanbul, f. 231a, MS: Paris, f. 138b, *Tārīḥ-i Ūljāitū*, p. 217, *Die Chronik des Qāṣānī über den Ilchan Ūljāitū (1304-1316)*, p. 182, text, p. 215.

Qadān の子 *Yayah* の子 *Ūruk-Tīmūr* の息子 *Qūtlūq-ḥwāgah*

22) 註39参照。

23) 『元史』卷四「世祖本紀一」“中統元年春三月戊辰，車駕至開平。親王合丹^{カダアン}・阿只吉^{アジキ}率西道諸王，塔察兒^{タガチャル}・也先哥^{イエスンゲ}・忽刺忽兒^{クラクル}・爪都^{ジャウトゥ}率東道諸王，皆來會，與諸大臣勸進”。

24) 『元史』卷六十「地理志三」，卷六十三「地理志六」，『定襄金石攷』卷三「故邢氏節行之銘」，『秋澗先生大全文集』卷八十一「中堂事記・中」[中統二年夏六月二日壬辰]，『滋溪文稿』卷二十三「元故參知政事王憲穆公行狀」，『大元馬政記』(『廣倉學窘叢書』甲類第一集) 14b-15a「刷馬」，『大元聖政國朝典章』卷五十二「刑部十四・詐僞」《詐》[詐寫大王令旨]，卷四十六「刑部八・諸賊」《取受》[替閑官員犯賊]，卷九「吏部三・官制」《投下》[投下不得勾職官]，卷二十七「戸部十三・錢債」《韓脫錢》[韓脫錢爲民者倚閣]，『モンゴル時代の「知」の東西』 p. 665, p. 726, p. 807.

25) 『モンゴル時代の「知」の東西』 p. 739.

26) 杉山正明「ふたつのチャガタイ家」。ちなみに、『ヴァッサーフ史』第4巻には、『オルジェイトゥ史』のA. H. 704の大使節團に對應する記事【海都^{カイドゥ}の勾當の結末とかれの子察八兒^{チャハル}大王への代替わり】とは別に、オルジェイトゥ・スルタンの即位の祝賀と^{イェケモンゴルウルス}大蒙古國全體の講和のための大使節團の記事【高貴なる名號^{チンギスカン}，成吉思汗^{ウルク}の後裔間の歲賜に關する *tungqal jarliq* 宣諭聖旨^{カアン}を將ち來る皇帝^{エルチ}の使臣の到着】があり，後者の大使節團は“13の投下^{アイマク}(= 大枝諸王)を

- 伴った皇帝^{カアン}の使臣たち、400 匹の舗馬^{ウラク}を擁する海都^{カイドゥ}の(子)察八兒^{チャバル}と土哇^{ドゥア}、火尼赤^{コニチ}と TRSW>Tersü 帖兒速^{テルス}、出伯^{チュベ}と哈班^{カバン}、忽都魯火者^{クトルホージャ}（『高貴系譜』によると、チャガタイ家ムバーラク・シャーの孫で、シャイフ・テムルの兄弟もしくは子／従兄弟。オゴデイ家のオルグ・テムルの子の可能性もある。註 21 参照）とその他諸大王たちの使臣たち”から構成されたという。*Ta'riḥ-i Vaṣṣāf, Bombay*, pp. 449-455, pp. 475-477, MS: Istanbul, f. 92b-101a, f. 134b-137b, *Mu'izz al-Ansāb*, MS: Paris, f. 34b-35a, MS: London, BL, Or. 467, f. 35b, MS: f. 36b-37a, MS: India, Maurana Azad Library, No. 41/42, f. 36b f. 37a.
- 27) *Tāriḥ-i Ūljāitū Sultān*, MS: Istanbul, f. 198b. l. 2-f. 201. l. 16, MS: Paris, f. 96a. l. 9-f. 100a. l. 19, *Tāriḥ-i Ūljāitū*, p. 144. l. 6-p. 150. l. 12, *Die Chronik des Qāṣānī über den Ilchan Ōlğaitū (1304-1316)*, p. 126. l. 27-p. 132. l. 29, pp. 230-231, text, p. 142. l. 16-p. 149. l. 20, *Dail-i Ğāmi' al-Tavāriḥ* MS: Paris, f. 469b. l. 14-l. 21, f. 482b. l. 18-Istanbul, f. 25a. l. 11-19, f. 37b-38a.
- 28) *Ğāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Rampur, p. 25, MS: St. Petersburg, f. 103a, MS: Paris, f. 201b-202a, f. 103a, MS: Istanbul, f. 158b-159a, f. 162b, MS: Taškent, f. 131a-131b.

Tüqūqān/Tūqān 脱歡の第 2 子 Munkā Timūr<Möngke-Temür^{モンケテムル} 忙哥帖木兒^{モンケテ}：この忙哥帖木兒には hātūn<qatun 后妃たち・妻妾たちがいており、より大なる三人の後妃の名が判明している。（第一は）Qūnqūrāt^{コンギラト} 弘吉剌族の Ūlgāi<Ōljei^{オルジェイ} 完者，（第二は）Ūšin^{フウシン} 許兀慎族の Sultān^{スルタン} 算灘妃子，（第三は）□□族の Qūtūi^{クトゥイ} 忽推妃子。10 人の息子をもうけている。詳細・順序は以下の通り。① Alqūi / Alqū 阿魯灰 ② Ayāci 阿牙赤/Abāci 阿八赤 ③ Tūdākān ④ Bürlük/Bürkük ⑤ Tūqtuā / Tūqtāi^{トクリルチャ} 脱脱 ⑥ Sarāi-Būqā ⑦ Hūlāqāi ⑧ Qadān 哈丹 ⑨ Qūdūqān ⑩ Tūgrilgah 脱憐察：[息子がひとりいる。かれの名は Ūzbāk^{ウズベク} 月即伯/息子がひとりいる。Ūzbik]。

※イスタンブル本の系圖は、忙哥帖木兒の子供たちを誤って Tūqān の第一子 Tāribū に繋いでいる。

Šu'ab-i Panggānah, f. 112b-f. 113a.

Činggiz hān—Ğüci hān—Bātū—Tüqūqān—Münkkā Timūr—Tūgrilgah—
Ūzbāk

Mu'izz al-Ansāb, MS: Paris, f. 20b-f. 22a.

Čingiz hān—Ğüci hān—Bātū—Tūqān—Munkā Timūr—Tūgrilgah—Ūzbak
hān^{ウズベクハーン} 月即伯汗—Ğānibik 札尼別—Birdibik

- 29) *Tāriḥ-i Ūljāitū Sultān*, MS: Istanbul, f. 174b, MS: Paris, f. 59b, *Tāriḥ-i Ūljāitū*, p. 89, *Die Chronik des Qāṣānī über den Ilchan Ōlğaitū (1304-1316)*, p. 82, text, p. 87.

[A. H. 709 年] 12 月 29 日 (1310 年 5 月 30 日) に、朮赤^{ジュチウルス}國の君主 Tūqtā^{トクタ} 脱脱^{エルチ}の使臣たちが a'ulja 拜見し、賞賜の榮譽に浴した。

とある。

- 30) *Ğāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Rampur, pp. 19-21, MS: Paris, f. 198a-199b, MS: Istanbul, f. 156a-157a, f. 162a, MS: Taškent, f. 128b-129b

目下、Ūrdah 斡兒答^{オルダ}の國の君主である火你赤^{ウルス}の子伯顏^{コニチ}は、かれの従兄弟の Kūpluk^{バヤン} がかれに反抗していて、かれをおそれるため、[拔都／かれ]の國の君主たる Tūqtā^{トクタ} 脱脱の邦土の疆域の先にきて、qūirtāi^{クルルタ} 聚會の名目でかれのもとに前去していた。のちはその物語の詳細が述べられるはずの如くに。

[Ğüci hān の第一子^{オルダ} 斡兒答^{ウルス}の第一子 Sartāqtāi^{サルタクタイ} 撒里答台の子] 火你赤^{コニチ}の第一子^{バヤン} 伯顏^{ウルス}：…現在、伯顏は自身の父火你赤の座次に坐して、體例に依ってかれの父の國を治めている。イス

ラームの君主——〔神ヨ〕彼ノ王國ヲ永遠タラシメタマエ（＝ガザン）に友情を抱き、示したいと願っており、使臣たちを絶え間なく派遣している。これより前、**Qūtūqū**の子**Tīmūr-Būqā**の子**Kūbluk**が「在前は、俺の父が國を治め着有來。相續せ教め者」と主張して蜂起し、海都と土哇から軍勢を得て、突如伯顔を襲ってきた。伯顔は敗走し、拔都の繼承者たる Tūqtā 脱脫の邦土の疆域に去き下馬した…第二子 Bāgqirtāi：…第三子：Čagān-Būqā…第四子：**Māqūdāi**…

Šu‘ab-i Panggānah, f. 108b.

Činggiz hān 成吉思汗——Ğüci hān 朮赤汗——Ürdah 斡兒答——Sarātaqtai 撒里答——**Qūniči** 火你赤*——**Bāyān**・Bāsqirattay・Čagān-Būqā・**Mātūdāi**

※この火你赤は皇帝の“tūrūq<Mon. turuq 倚仗”と呼ばれている。

Mu‘izz al-Ansāb, MS: Paris, f. 18a-19b.

Čingiz hān——Ğüci hān——Ürdah——Sartāqtai——Qūniči*——**Bāyān**・Čagān-Būqā・Bātūdāi・**Bāšqirt**

※この火你赤は長期間、斡兒答の國の支配者であった。車での移動に、どんな馬でも引張れないほど肥えていた。日夜、衛兵たちが、かれを死んでしまうような寝方をしないように、脂肪が氣道を塞がないように監視していたが、結局は、ああ御救いください！眠りこみ、かれの喉の脂肪が隆起して身罷った。

なお、MWMKQTAY は Mātūdāi/Māqūdāi に對する蔑稱だろう。

31) Ğāmi‘ al-Tavāriḥ, MS: Rampur, pp. 23-24.

〔Ğüci hān の第一子〕斡兒答の第 6 子 **Qūtūqūi**：かれには 2 人の大后がいたのであった。ひとりとは Sülüqān 后 という名 [で 族の出身]、もうひとりの名は Tūbārgin で 欽察たちの部族の出身。かのじよたちから 2 人の息子をもうけた。**Tīmūr-Būqā**, Ūlqūtū. **Qūtūqūi** の第一子 **Tīmūr-Būqā**：かれには 4 人の大后がいたのであった。第一は弘吉刺族の Tisūr 官人の娘 **Kūkgin**…上述のこれらの后妃たちから 6 人の子をもうけている。詳細と順序は以下のとおり。**Kūluk**：Kūkgin から生まれた。Tūqā-Timūr, Ğāngqūt, Būqā-Timūr, Sāsī, **Ūsānān**：かれも Kūkgin から生まれた。斡兒答の第 7 子 **Hūlāgū** 旭烈兀：この Hūlāgū は Tankqūt 西夏族の妻妾から、彼女の名は Armūk Īgāci<egeci 姐姐、髪が地面に届かんばかりにひじょうに長かった。かれには子女たちが無かった。平安アレ。

Ğāmi‘ al-Tavāriḥ, MS: Paris, f. 200b, MS: Istanbul, f. 158a, f. 162a, MS: Taškent, f. 130b.

〔Ğüci hān の第一子〕斡兒答の第 6 子 **Qūtūqūi**：かれも子女たちがいたのかいなかったのか明らかでない。斡兒答の第 7 子 **Hūlāgū** 旭烈兀：かれには 2 人の大后がいたのであった。ひとりとは Sülüqū/Sülüqān 后 という名 [で 族の出身]、もうひとりの名は Qūtārgin/Tūrbārgin で 欽察たちの部族の出身。かのじよたちから 2 人の息子をもうけた。〔ひとりとは〕**Tīmūr-Būqā**, [もうひとりとは] Ūlqūtū [という名。神ヨ平安アレカシ]。旭烈兀の〔息子の／第一子〕**Tīmūr-Būqā**：かれには 4 人の大后がいたのであった。第一は弘吉刺族の Tisū 官人の娘 **Kūkgin**…上述のこれらの后妃たちは 6 人の子をもうけている。〔順序は以下のとおり〕**Kūluk/Kūbluk**：Kūkgin から生まれた。Tūqā-Timūr, Ğāngqūn/Ĝāngqūt, Būqā-Timūr, Sāsī, **Ūsānān**：かれも Kūkgin から生まれた。旭烈兀の第二子 Ūlqūtū：…

※系圖の情報も同じ。

Šu‘ab-i Panggānah, f. 108b, Mu‘izz al-Ansāb, MS: Paris, f. 18b-19b.

Činggiz hān/Čingiz hān—Gūci hān—Ūrdah—Hūlāgū/Hūlāūū

Šu'ab-i Panggānah, f. 111b, Mu'izz al-Ansāb, MS: Paris, f. 20a.

Činggiz hān/Čingiz hān—Gūci hān—Ūrdah—Qūtūqū—Timūr-Būqā—
Kūpālāk/Kūbluk* · Tūqā-Timūr · Ġāngqūn/Ġāngqūt · Būqā-Timūr · Sāsī · Ūsānān/
Ūsānān

※この Kūpālāk は 3 人の子供をもうけたといわれている。かれの子供たちが亡くなってしまうと、かれらの名前は短期間の経過のうちに轉じてしまった。かれらの名前が確かではなく、記録されなかったために。これは、かれらの使臣たちの口述ではないが、息子たちがあつたことがわかるように、その正方形の枠を描いておこう（われらは）／この Kūbluk は適当な息子たちが次々に身罷って、短期間に轉じてしまった。かれらの名前は確かではなく記録されなかったために。

- 32) Ġāmi' al-Tavāriḥ, MS: Rampur, p. 25, MS: Paris, f. 201b-202a, MS: St. Petersburg, f. 103a, MS: Istanbul, f. 159a, f. 162b, MS: Taškent, f. 131b.

Tūqtuā /Tūqtāi 脱脫: Mangū hān/Manggū hān/Munggū qān 蒙哥皇帝の姉妹 Kilmīs 怯里迷失(可里美思) aqā 阿哈——Salgīdāi 撒朮帶 駙馬の妻であつた——の娘 完者 妃子より生まれた。現在、朮赤の國の君主はかれである。二人の後妃をもち、ひとりには Būlgān 不魯罕, [もう一人の弘吉剌族の Tūkülčah からはひとりの息子をもうけている。Yābūš という名／そのうちもう一人は弘吉剌族の Tūkülčah で三人の息子がいる。詳細は以下の通り。Yābūš/Yābarūš/, Ankiyar/Īl-basār, Tūkil-Būqā]

Šu'ab-i Panggānah, f. 113a.

Činggiz hān—Gūci hān—Bātū—Tūqūqān—Mūnkkā Timūr—Tūqtuā—
Tūkal-Būqā · Īl-Bāsār · Tūkil-Būqā

Mu'izz al-Ansāb, MS: Paris, f. 21b-f. 22a.

Čingiz hān—Gūci hān—Bātū—Tūqān—Mūnkā Timūr—Tūqtuā—Tūkal-
Būqā · Bātū-taš? · Īl-Bāsār

- 33) Ġāmi' al-Tavāriḥ, MS: Rampur, p. 49, MS: St. Petersburg, PNS46, f. 109b.

察合台の第 2 子 Mūā-tūkān: …Mūā-tūkān の第 2 子 Īsūn-tūā 也孫禿阿: この也孫禿阿には 3 人の息子がいたのである。詳細と順序は以下の通り。① Mūmin: かれの名は yayah 爺爺 ② Barāq 八剌: かれには 4 人の息子がいた。Bik-Timur 別帖木兒, Dūā 都哇, Būzmah 卜思巴, Ūlādāy /Ūlādāi 兀剌惕 ③ Basār 八撒兒

Ġāmi' al-Tavāriḥ, MS: Paris, BnF, suppl. persan209, f. 210b-211a.

察合台の第 2 子 Mūā-tūkān: …Mūā-tūkān の第 3 子 Īsū-tūā: かれには 3 人の息子がいたのである。詳細と順序は以下の通り。第一は Mūmin。かれには 2 人の息子がいる。一番目の名は yayah。かれの息子の名は Bilgah-Timūr。二番目の名は Urūk。第二は Barāq。かれには 5 人の息子がいた。Bik-Timur, Dūā, Tūqbah, Ūlādāi, Būzmah。第三は Basār: 阿八合汗が, Qarāūnās の排除のため哈烈に前赴した歳に, 阿合馬が Ĥurāsān から逃げて来た時分に, 此處に歸附してきた。臣僚たちがかれを殺した。

Ġāmi' al-Tavāriḥ, MS: Istanbul, f. 169a, f. 171a, MS: Taškent, f. 140b, f. 141b, MS: London, BL, Or. Add. 16688, f. 9a-12a.

察合台の第 1 子 Mūā-tūkān: …Mūā-tūkān の第 3 子 Yīsūn-tūā: この Yīsūn-tūā には 3 人の息子がいたのである。詳細と順序は以下の通り。① Mūmin: かれには 2 人の息子がいる。順序は以下の通り。Yayah で息子 1 人をもうけておりかれの名は Bilkā-Timūr であ

る。Ūrūk。② **Barāq**：かれには5人の息子がいた。順序は以下の通り。Tuqtār/Tuqtāi, Ūlādāi, Būzmah, **Dūā**^{*}, Bik-Timur ③ Basār：阿八合汗が, Qarāūnās の排除のため
ハート 前に前赴した歳に, [阿合馬が Hūrasān から逃げた時分に], 此處に歸附してきた。[臣僚たちがかれを殺した]。

Barāq には息子たち, 孫たちがたくさんいる。本書の執筆後に判明したので, かれらの名は, この箇所では不可能だった。このため言及しなかった。かれの分枝については, 究明されねばならないため, 既述のままである。

※系圖には Dūā の子として Qutlg-hvāgah, Kahan-Būqā, **Kūṅgāk**^{コンチュク} 寬闊, Timūr-Būqā, **Īsin-Būqā**^{エセン フカ} 也先不花, Qubilāi, **Kabik**^{ケベク} 怯伯, **Abūkan**^{エセン フカ} 也不干, **Īt-qūli**, Manklik-Timūr が挙げられる。

Šu'ab-i Panggānah, MS: Istanbul, f. 119b.

Ğinkiz hān—Ğādāi hān—Mūvā-tūkān—Mō'e-tūgen—Īsūn-tūā—**Barāq**—**Dūā**^{*}—Qutlg-hvāgah · Gāgān-Būqā · **Kūṅgāk** · Timūr-Būqā · **Īsin-Būqā** · Qubilāi · **Kūpāk** · **Abūkan** · **Īt-qūli** · Minklik-Timūr

※この Tūqā は現在, かの^{ウルス}國の君主, 父 **Barāq** の座次にある。

Mu'izz al-Ansāb, MS: Paris, f. 31a-32a.

Ğinkiz hān—Ğāgātāi hān—Mī-tūkān—Īsūn-tūā—**Dūā hān**^{*1}—**Īsin-Būqā hān** · Tarmahšīrin · Tuḡān-šāh · Bahrām · Rustam · Īlğikdāi · Šukulği hvāgah · **Īt-qūli** · Gāgān-Būqā · **Ūbūkan** · Īl hvāgah · Ikirdāi? · Īmir hvāgah · Qutlug-hvāgah · Qātlūq · Isulq? · **Kūṅgāk**^{コンチュク} 寬闊^{*2} · Sūz'ātū · Daurat-Timūr · Huma'un · **Kabak hān**^{ケベク} 怯伯^{*3}

※1 Dūā hān は 690A. H. (1291 年 1 月 4 日～12 月 23 日) に察合台の國の君主となった。706A. H. (1306 年 7 月 13 日～1307 年 7 月 2 日) に海東青になった。16 年間, 支配した。

※2 Dūā hān が亡くなった 706A. H. にかれの臣僚たちが^{コンチュク}寬闊を Bārs-kül<Bars-Köl より連れてきて, Almāliq<Almalīq の上部の Sitköl<Sūt-Köl において, その父の王座に坐らせたが, かれもまた 1 年半後, İldüz の sarāy にて身罷った。

※3 Kabak hān は Nālīqū を顛覆に至らしめた後, pādšāh 君主となった。その兄の **Īsin-Būqā** は Qāān の根前にいた。かれの召喚に遣わし, 來到すると, 兄の到着まで在って一年統治していた王權を兄に, また兄が身罷ると, かれが支配者となった。かれの政府の時代に, Mā-warā' al-nahr は繁榮した。かれは 721A. H. (1321 年 1 月 31 日～1322 年 1 月 19 日) に生來・解放の病いを發し, ここに逝った。かれの王權の期間は 8 年より多くはなかったのである。

- 34) 『元史』卷二十四「仁宗本紀一」[皇慶元年二月]“庚午(四日=1312 年 3 月 12 日), 西北諸王也先^{エセン フカ}不花^{コンチュク}遣使貢珠寶・皮幣・馬駝, 賜鈔一萬三千六百錠”, “[三月]甲寅(十八日=1312 年 4 月 25 日), 西北諸王也先^{エセン フカ}不花^{コンチュク}等遣使以橐駝, 方物入貢”, “[皇慶二年二月(1313 年 2 月 26 日～3 月 27 日)]壬午, 西北諸王也先^{エセン フカ}不花^{コンチュク}進馬・駝・璞玉”とあるから, それ以降の話ということになる。次註参照。

- 35) *Tārīḥ-i Ūljāitū Sultān*, MS: Istanbul, f. 211, MS: Paris, f. 115a, *Tārīḥ-i Ūljāitū*, pp. 174-175, *Die Chronik des Qāšāni über den Ilchan Ūljāitū* pp. 151-152., text, p. 175. に,

ババは, 那^{モンゴル}蒙古曆の長年 < 卯年に相當する A. H. 715 年 6 月 (1315 年 9 月 2 日～30 日) に, 海都^{カイドゥ}の隨從・親類に屬するほかの諸王たち數名ともども完^{オルジェイトウスルタン}者都算端の御前に訴え出て「卑劣・恐怕なる埋伏から準備され來^{たところの}的休息・安靜の避難所に至^てつ着, 恐怖・恐

れ・恫喝・威嚇から安全な命運と了^{なつた}」とて看做した。八八の案件の故に、完者都算端^{オルジョイトウスルタン}と朮赤汗^{ジョチカン}の國^{ウルス}の君主たる烏即別^{ウズベク}大王^{オグル}の間にありとあらゆる疑心暗鬼が現れ、何度も使臣たちが否定・抗辨の問責のうちに往來した。AYSNBWGA 也先不花^{エセンブカ}大王はこの状況を聞くと、好機を捉え煽動・攪亂をなした。烏即別が煽動・攪亂のうちにかれと同盟・融和することを願い、烏即別に「鐵穆耳^{テムル}皇帝^{カン}は、朮赤汗^{ウズベク}の國^{オグル}の汗位に相應しく無い。欽察^{キンサ}帽^ハの統治權を muqaddar 規定^{もの}的に委任せんことを討求す」との信書を送った。月即伯^{ウズベク}はかれの詭計・詐欺によって鐵穆耳^{テムル}皇帝^{カン}に對し反逆者・敵となった。

とは同じ話が載るが、ここは成宗テムルでは時期が合わない。カーシャーニーの編纂ミス——かれが大元ウルスの歴史に詳しくなかったことの證左——だろう。これは、『清容居士集』卷三十四「拜住元帥出使事實」“皇慶二年（1313）、仁宗以金印賜丞相^{ボロト}孛羅^{ハルバン}，且俾住哈兒班答王所議事。至中途，遇也先不花王^{エセンブカ}，疑有間諜，執以問…”，『道園學古錄』卷二十三／『國朝文類』卷二十六虞集「句容郡王世績碑」“延祐元年（1314）、也先不花等諸王，復叛”の狀況と對應する。

- 36) 『元史』卷二十五「仁宗本紀二」“[延祐元年夏四月] 壬辰（九日=1314年5月23日），諸王^{トウ}脫脫^{トア}，以月思別襲位”。
- 37) モンケの死後に生じたフレグ・ウルスとジョチ・ウルスの争いについては、『モンゴル時代の「知」の東西』pp. 701-709 参照。
- 38) *Tārīḥ-i ʿUljāitū Sultān*, MS: Istanbul, f. 159b, MS: Paris, f. 36b-37a, *Tārīḥ-i ʿUljāitū*, pp. 53-54, *Die Chronik des Qāṣānī über den Ilchan Ölgäitū* p. 57, text, p. 53. *Ḍail-i Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Paris, f. 450a, MS: Istanbul, f. 7b.

qoyñ-yıl 未年<午年の biryigirminc ay 十一月十九日（1306年12月25日）に相當する6月18日の日曜日（1306年12月25日）…「未年<午年 sākişinc ay 八月に相當する A. H. 706 に、Dua^{ドゥア} 都瓦は腦炎・白喉（=ジフテリア）の病氣のため逝去した。自身の行いの應報・諸々の行爲の清算に至った」との都瓦^{ドゥア}の死の通知に對し、「虚しき都瓦^{ドゥワ}の最期の餞/件」に、寶石類を şadaqa 喜捨した。かれの死後、かれの政府の臣僚たち・柱石たちは、かれの息子の 寬闊^{コンチエク}を Bars-kül<Bars-Köl 八兒思闊^{バルスキル}より連れてきて、Almāliq 阿里麻里^{アルマリク}／阿力麻里地方の上部の Sitkül<Süt-Köl 乳湖において、察合台^{チャガタイ}の國^{ウルス}の王座に即位させたが、かれもまた1年半後、törtünç ay 四月の月に、İldüz^{イルドゥズ}の sarây^{サルアイ}の qışlamişi 住冬において、出發の太鼓を打倒してすぐに父の踪跡を辿った。

『元史』卷二十二「武宗本紀一」“[至大元年秋七月壬申（16日=1308年8月2日）] 遣塔察兒^{タガチャル}等九人使諸王^{コンチエク} 寬闊^{ウルグ}，遣月魯^{トルブカ}等十二人使諸王^{トルブカ} 脫脫^{トクトア}…癸酉（8月3日）遣脫里不花^{トルブカ}等二十人使諸王^{トルブカ} 合兒班答^{スニイタイ}（=オルジョイトウ・スルタン），“[九月丙辰朔（9月15日）] “命雪尼台^{テムル}・察使薛迷思干^{チャク}部”，“辛酉（9月21日），遣人使諸王^{チャバ} 察八兒^{コンチエク} 寬闊^{ウルグ}”，“癸亥（9月23日），萬戸也列門^{スニイタイ}・合散來自薛迷思干^{テムル}等城^{チャク}，進呈太祖時所造『戸口青冊』，賜銀鈔幣帛有差”，[庚辰（10月9日），中書省臣] “又言「薛迷思干^{セミスケント}・塔刺思^{タラス}・塔失玄^{タシユケント}等城，三年民賦以輸縣官。今因雪尼台^{スニイタイ}・鐵木^{テムル}・察使彼^{チャク}，宜令以二年之賦與寬闊^{コンチエク}，給與元輸之人，以一年者上進」並從之”。

- 39) *Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Rampur, pp. 48-52, MS: St. Petersburg, f. 110b-111a.
察合台^{チャガタイ}の第1子 Mūj-yayah 爺爺^{チャガタイ}：…察合台^{チャガタイ}の第2子 Mūā-tūkān：…Mūā-tūkān の第3子 Būrī：…Būrī には2人の息子がいる。第1は Abišqah 阿必失哈^{アビシカ}：この阿必失哈は子息をもたなかった…第2は Agīqi 阿只吉^{アジキ}：この阿只吉は Qubilai-Qāan 忽必烈皇帝^{クビライカアン}の侍侯であつた。現在、Timūr-Qāan 鐵穆耳^{テムル}皇帝の根前に居る。非常に老齡で、彼處で侍侯する諸王全てのなかで最も威信があり、尊敬すべきかつ確固たる重鎮である。かれには3人の息

子がいる。① **Ūruk** ② **Ūruk-Timūr** ③ **Aršil-Türkân**。まさしく孫たちももっており、侍侯している…察合台の第3子 **Yisū-Münkkā** 也速蒙哥：…察合台の第4子 **BLKŠY**：…察合台の第5子 **Bāigū** 拜住…察合台の第6子 **Bāidār**：…察合台の第7子 **Qadaqī** < **Qadaqī/Qadagi**：かれの母は、**Tükân** < **Tügen** 后妃であって、この **Qadagi** は5人の息子をもっている。以下の順である。① **Bābā** 八八 ② **Tüqū** 脱忽 ③ **Nālīqū/Tālīqū**, ④ **Būqā-Timūr** 不花帖木兒 ⑤ **Būqā** 不花：しばらく、察合台の國の君主であつた。かれが亡くなると **Balāq** の息子 **Dūā** に與えられた。察合台の第8子：**Sārbān**

Ġāmi'al-Tavāriḥ, MS: Paris, f. 210a- 211a.

察合台の第1子 **Mūji-yayah**：…察合台の第2子 **Mūā-tūkān**：…**Mūā-tūkān** の第2子 **Būrī**：…**Būrī** は5人の息子をもっている。第1は **Abišqah**：この阿必失哈は子息をもたなかった…第2は **Āgīqī** 阿只吉：この阿只吉は **Qubilāi-hān** 忽必烈汗の侍侯であつた。現在、**Timūr-Qāan** 鐵穆耳皇帝の根前に居る。非常に老齡で、かれは彼處にいる諸王全てのなかで最も威信があり、尊敬すべきかつ確固たる重鎮である。かれには3人の息子がいる。① **Ūruk** ② **Ūruk-Timūr** ③ **Aršil-Türkân**。まさしく子女たちももっており、侍侯している…第3は **Qadāngī Sāgān** < **Qadagi/Qadaqai-Sečen**：かれは4人の息子をもっている。**Nālīqū**：かれは3人の息子をもっている。**Timūr**, **Ūradāi**, **Tümān**。次に **Būqū**：かれは2人の息子をもっている。**Dū al-Qarnain**, **'Alī**。次に **Būqā-Timūr**：…次に **Būqā**：…第4は **Aḥmad**…第5は **Abūkān**…察合台の第3子 **BLKŠY**：…察合台の第4子 **Sārbān** 撒里蠻：…察合台の第5子 **Yisū-Münggā** 也速蒙哥：…察合台の第6子 **Bāidār**…察合台の第7子 **Qadaqī**：かれの母は、**Tükân** < **Tügen** 后妃であって、この **Qadagi** は5人の息子をもっている。**Bābā**, **Tüqū**, **Nālīqūā**, **Būqā-Timūr**, **Būqā**。察合台の第8子：**Bāigū**,

Ġāmi'al-Tavāriḥ, MS: Istanbul, f. 168a-171b, MS: London, BL, Or. Add. 16688, f. 9a-12a.

察合台の第1子 **Mūā-tūkān**：…**Mūā-tūkān** の第2子 **Būrī/Tūrī**：…**Būrī** は5人の息子をもっている。詳細・順序は以下のとおり。① **Qadaqī Sāgān/Qadaqī Sīgān** < **Qadagi/Qadaqai-Sečen**^{*1}：かれは4人の息子がいる。以下の順である。① **Tālīqū/Ṭālīṭū**^{*2}：3人の息子をもっている。**Timūr/Ūruk-Timūr**, **Ūradāi**, **Tümān** ② **Būqū**：2人の息子をもっている。**Dū al-Qarnain**, **'Alī**。③ **Būqā-Timūr** ④ **Būqā** ⑤ **Aḥmad**：…⑥ **Āgīqī** 阿只吉：かれには2人の息子がいる。(1) **Ūruk**：2人の息子をもつ。**Pūl-Būqā**, **Ġāzān**。[(2) **Aršil-Türkân**] ④ **Abūkān** 也不干：…⑤ **Abišqah**：かれには息子が1人あり、[その名は **Ūruk/Ūruk** という名]。ところで、この阿只吉は **Qubilāi-Qān** 忽必烈皇帝の侍侯であつた。現在、**Timūr-Qān** 鐵穆耳皇帝の根前に居る。非常に老齡で、かれは彼處にいる諸王全てのなかで最も威信があり、尊敬すべきかつ確固たる重鎮である。いっぽう **Abišqah** は…察合台の第2子 **Mūji-yiyah** 爺爺：…察合台の第3子 **BLKSY**：…察合台の第4子 **Sārbān/Sārmān** 撒里蠻：…察合台の第5子 **Yisū-Münggā/Yisū-Munkā** 也速蒙哥：…察合台の第6子 **Bāidār/Bāidar**。

※1 イスタンブル本系圖の注記には、“この **Qadagi/Qadaqai-Sečen** の母は弘吉剌族の **Yisūkü** 妃だったのである。かれに **Sečen** と **Manggū-Qān** が名付けた。baqši 僧たちの慣習によって **parāšidah** ざんばら髪にしていた / **tarāšidah** 剃髪にしていた。**Manggū-Qān** と共に漢兒の田地に軍を以て前去し、道中亡くなった。かれの子女たちは現在 **Dūā** の根前にいる”とある。なお、系圖では **Qadagi/Qadaqai-Sečen** の子供たちに、誤って **Būqū** の子の **Zū al-Qarnain** と **'Alī** が加えられている。

- ※ 2 イスタンブル本系圖の注記には, “この Tāliqū は Kirmān の Sultān Quṭb al-Dīn の娘 Tūrken という小名の^{もの}的より生まれた。Ḥaṣr-i barš 一切れの限定相続人? と呼ばれている” とある。

Šu‘ab-i Paṅḡānah, MS: Istanbul, f. 118.

Ġinkīz hān—Ġādāi hān—Mūvā-tūkān—Būrī<Buri—**Qādāqī Sāḡān**<Qadaqi/
Qadaqai-sečen^{*1}—**Nālīqū**<**Nalīqu**^{*2}—□□—Timūr · Ūrūqūdāi · Tūmān

- ※ 1 この Qadagi/Qadaqai-Sečen の母は^{コンギラト}弘吉剌族の Yisū 妃だったのである。かれは Mangū-Qān によって Sečen と命名された。baqši 僧たちの慣習によって剃髪していた。Mangū-Qān と共に^{キタイ}漢兒の田地に軍を以て前去し、道中亡くなった。かれの子女たちは現在 Dūa の根前にいる。
- ※ 2 この Nālīqū は Kirmān の Sultān Quṭb al-Dīn の娘 Tūrken という小名の^{もの}的より生まれた。ḥafir-i turš 憂鬱な守衛? と呼ばれている。

Ġinkīz hān—Ġādāi hān—Mūvā-tūkān—Būrī—**Qādāqī Sāḡān**—Tūqū—
‘Alī · Dū al-Qarnain

- ※ 1 この Tūqū も上述のこの Tūrken から生まれた。弓術に傑出していて自身の時代であつたが、18 歳で亡くなった。

Ġinkīz hān—Ġādāi hān—Mūvā-tūkān—Būrī—**Aḡīqī**—Arsil-Türkān · **Ūrūk**
Ġinkīz hān—Ġādāi hān—Mūvā-tūkān—Būrī—**Aḡīqī**—**Ūrūk**—Yil-Būqā ·
Qāzān

Ġinkīz hān—Ġādāi hān—Mūvā-tūkān—Būrī—Abišqah—**Ūrūk**

Mu‘izz al-Ansāb, MS: Paris, f. 29b-30a.

Ġinkīz hān—Ġāḡatāi hān—Mī-tūkān—Būrī—**Qādāqī Sāḡān**^{*1}—**Nālīqū**^{*2}
—Ūrūqūdāi · Tūmān · Timūr

Ġinkīz hān—Ġāḡatāi hān—Mī-tūkān—Būrī—**Qādāqī Sāḡān**—Tūqū—**Dū**
al-Qarnain · ‘Alī-ūḡūl

Ġinkīz hān—Ġāḡatāi hān—Mī-tūkān—Būrī—**Aḡīqī**—Arik-Kürkān · **Ūrūk**^{*3} ·
Tās-Timūr · Timūr-Būqā · Is-Timūr · Yūldās-Timūr

Ġinkīz hān—Ġāḡatāi hān—Mī-tūkān—Būrī—**Aḡīqī**—**Ūrūk**^{*3}—Īl-Būqā ·
Qazān

Ġinkīz hān—Ġāḡatāi hān—Mī-tūkān—Būrī—Abišqah—**Ūrūk**

- ※ 1 この Qadagi/Qadaqai-Sečen は、その母が^{コンギラト}弘吉剌族の Yisūn 妃であつた。かれは Mangū-Qān によって Sečen と命名された。baqši 僧たちの慣習によって剃髪していた。Mangū-Qān と共に^{キタイ}漢兒の田地に軍を以て前去し、道中亡くなった。かれの子女たちは大多数が Dūa の根前にいた。
- ※ 2 この Nālīqū の母は Kirmān の Sultān の娘 Tūrken という小名の^{もの}的で、かれは Hizr と呼ばれている。Tūqū はかれと同一の母から生まれた。Nālīqū は **709A. H.** (1309 年 6 月 11 日～1310 年 5 月 30 日) に Kūṅgāk ^{コンチュク}寛閣の後、君主に坐せしめられた。かれは Dūa の後裔を撲滅せんと企畫をなした。Dūa の息子の Kabak ^{クワダテ}怯伯は機会を見つけ、^{トイ}祝延の終わりに、Nālīqū が夜眠ってしまうと、一味と共に事を起こし、かれを殺した。そのご、**710A. H** (1310 年 5 月 31 日～1311 年 5 月 19 日) に統治権は^{ケベク}怯伯に確定された。
- ※ 3 この **Ūrūk** は **Nālīqū** に背いたが、賭博の^{ノコル}伴當の手にかかり殺害されるに至った。

- 40) mutarris 楯持つ者よ, mihrās 闇夜に恐るもの無き丈夫よ, と解すことも可能だが, その場合, 後に続く va が不要。
- 41) *Ġāmi'al-Tavāriḥ*, MS: Paris, suppl. persan209, f. 172b, f. 174a. MS: Paris, BNF, suppl. persan 1113, f. 130b, f. 131b.

[Üktāi 窩闊台^{オゴダイ} 第1子 Kiük 貴由^{グユク}: …かれには3人の息子がいた。順序は以下の通り。① Hwāgah ügöl: かれの母は□□族の Qaimiš^{カドン} 皇后であった。かれには判明している子息がない。② Nā'ü^{ナグ} 腦忽③ Hüqū<Hö'ü^{ホグ} 火忽: かれの母は Qumāi/Qūmāi 妃であった。かれには現在 **Tükmaḥ** 朮苦滅^{トクメ} という名の孫 —— 海都^{カイドゥ}の息子および察八兒^{チャバル}と ta[mā]gāmiši 争っている —— があるそうだ。かれの farmān 令旨は得ておらず, 右手の道にいたるそうだ。その父もまた **Tükmaḥ** という名だったのである。

[Üktāi 窩闊台皇帝^{オゴダイカアン}の第5子 Qāši^{カシ}の子海都^{カイドゥ}の第3子] Ürüš 幹羅思^{オロス}: 海都の大皇后で Dübgin 朶兒別眞^{ドルベルジン} という名のものから生まれた。父の死後, 王國を tamāgāmiši 争っており, 窩闊台皇帝の子 **Tükmaḥ** の子 **Tükmaḥ** はかれとこの問題について一致・同盟している。

Ġāmi'al-Tavāriḥ, MS: Istanbul, f. 134b, f. 135b, f. 137b, MS: Taškent, f. 106a, f. 107a, f. 109a.

[Üktāi 窩闊台皇帝^{オゴダイカアン}の第1子 Kiük 貴由^{グユク}: …かれには3人の息子がいた。順序は以下の通り。① Hwāgah ügöl: かれの母は□□族の Qaimiš^{カドン} 皇后であった。かれは3人の息子を授かっている。順序は以下のとおり。(1) **Tükmaḥ**: かれには4人の息子がいる。Yüsmüt・Yisükān・Ülgāukān・Ābāci (2) Būsḡū (3) Hüqū: かれは10人の息子を授かっている。順序は以下の通り。(1) Ürkah (2) Qūmbū (3) Kūncak (4) Dürḡi (5) Tūbšin (6) İrkāmān/İrmaksan (7) Takūs-Būqā (8) Takši (9) Dārbūnk* (10) İkir dai

※系圖になし。かわりに İškib があがる。

[Üktāi 窩闊台皇帝^{オゴダイカアン}の第5子 Qāši^{カシ}合昔^{カシ}の子海都^{カイドゥ}の子] Ürüš 幹羅思^{オロス}: 海都の大皇后で Dübgin 朶兒別眞^{ドルベルジン} という名のものから生まれた。父の死後, 王國を tamāgāmiši 争っており, 窩闊台皇帝の子 **Tükmaḥ** の子 **Tükmaḥ** はかれとこの問題について一致・同盟している。

Šu'ab-i Panggānah, MS: Istanbul, f. 124b.

Ġinkīz hān—Ükdai hān—Küyük hān—Hwāgah ügöl—**Tükmaḥ***

※この男等の母は, KYČK hān<Könček 寬徹汗^{コンチュクカン}の娘たる 妃^{カトン}だったのである。

Mu'izz al-Ansāb, MS: Paris, f. 40b-41a.

Ġinkīz hān—Ükdai Qāān—Kiük hān—Hwāgah ügöl—**Tükmat**

- 42) *Ġāmi'al-Tavāriḥ*, MS: Paris, f. 174, MS: Istanbul, f. 135b, f. 138a, MS: Taškent, f. 107a, f. 109b.

[Üktāi 窩闊台皇帝^{オゴダイカアン}の第5子 Qāši^{カシ}合昔^{カシ}の子海都^{カイドゥ}の第1子] Čāpār 察八兒^{チャバル}: □□族出身の□□より誕生した。現在, 海都^{カイドゥ}の座次にはかれが在る。かれをみた人々の話では, ひじょうに痩せて貧相, かれの顔と髭は Rūs 阿羅思^{オロス} (幹羅思)・Čarkas 撒耳可思^{チュルクス} (徹兒怯思) の人みたいで, [中肉中背である] とのことである。[かれには7人の息子がいる。順序は以下のとおり。Būri-Timūr・Ülgāi-Timūr・Qūluq-Timūr・Čāčaktū・Tūq-Timūr・Čariktū・Ülādāi. 平安アレ]

- 43) 'Alā al-Dīn 'Aṭā Malik Juvaynī, Qazvinī. M (ed), *Ta'riḫ-i-Jahān Gushā*, vol. 1, Leyden & London, Brill, 1937, p. 31, pp. 226-227, MS: Istanbul, Süleymaniye Kütüphanesi, Fâtif4316, f. 27b, f. 168a-168b, MS: BNF, suppl. persan2018, f. 18a, f. 109a, MS: suppl. persan 205. f. 10b, f. 61b, MS: suppl. persan1375, f. 11b-12a, f. 81a, MS: suppl. persan1556, f. 11b, f. 78a.,

・察合台^{チャガタイ}を [Qayālig・] Uigūr/Uiqūr 畏兀兒^{ウイグル}の諸城鎮の疆域から Samarqand 撒麻耳干^{サマルカンド}・Buḥārā 不花剌^{フハラ} (不哈剌) まで, かれの居住地は, Almālig 阿里麻里^{アルマリク}の近くにある

Qunās/Quyās だった。

- ・Mā-warā' al-nahr · Turkistān ^{トルキ}途魯吉の地の諸城鎮が解放されると、(かれ=察合台汗^{チャガタイハン}及びかれの) 子供たちと軍勢の駐屯地は、撒馬兒罕^{サマルカンド} から Biš-Balig ^{ビシュバリク} 別失八里の近くまで、四方は諸王の宿營に相應しい卓越した娛樂の諸地であった。その避暑地は、阿里麻里^{アルマリク}と [Qūnās/Qūbāq] —— 春・夏にはアラムの果園に似かよう —— であった。水鴨たちの群れのための köl と呼ばれる複數の大禁地 (=山陵) をかれの疆域内に設けていた。Qutluğ という名の邑も建設した。

- 44) *Ġāmi'al-Tavāriḥ*, MS: Paris, f. 174, MS: Istanbul, f. 135b, f. 138a, MS: Taškent, f. 107a, f. 109b.
[Üktāi ^{オゴタイ}窩闊台皇帝の第5子 Qāsi ^{カシ}合昔の子海都の子] Yāngīčār ^{ヤンギチャル} 仰吉察兒: □□族の□□妃より生まれた。容貌と學識があり、父はかれをひじょうに愛した。全軍とともに、Ürdah ^{ウルダ} 幹兒朶 (阿哈) の後裔に屬する Qūniči ^{クニチ} 火你赤の Bayān ^{バヤン} 伯顔の方面の Sübiah < šibe'e 藩籬を「互いに敵である」とて、かれに治めさせた。伯顔は皇帝およびイスラームの君主——彼ノ統治ヲ永遠タラシメタマエ——と友好的であり、かたやかれの従兄弟の Kūbluk ^{クイドゥ} が海都と土哇の子たち^{ドゥア}の側に傾いていたので、かれらは伯顔が皇帝およびイスラームの君主の軍勢に ^{バヤン}伯顔 ^{カアン}カアン^{カアン}の諸軍に、イスラームの君主とともに] 連合してかれらの勾當の損害の理由にならないようにすべく、かれを教唆していた。伯顔が朶赤^{バヤン}の後裔に屬するので、朶赤^{ジョチ}の寶座を擁する Tūqtai ^{トクタイ} 脫脫はかれの庇護者であり、現在、海都と土哇の息子たちとの戦いに出陣せんと思案中である。この状況を以て、[Āğurūqči ^{アウルク} 奥魯赤と Üladai ^{ウラダイ} 兀剌朶という名の] 使臣たちを此處 (=フレグ・ウルス) に派遣してきた。[平安アレ]。

- 45) *Tarih-i Üljaitü Sultān*, MS: Istanbul, f. 154a, MS: Paris, f. 28a-28b, *Tarih-i Üljaitü*, p. 41, *Die Chronik des Qāšāni über den Ilchan Öljaitü* (1304-1316), pp. 47-48, text, pp. 41-42.

(土哇)はかれ (=察八兒^{チャバル}) の後繼仰吉察兒^{ヤンギチャル}を Qaidu ^{カイドウ}海都の國の君主に据えた。いっぽう、察八兒はその母 Kūkū hatūn ^{ククト}の營盤に住した。仰吉察兒はしばらく君主として新年(の儀)に奔走していた。土哇は Būkmā ^{トクメ} < 禿苦滅をも死神の處罰の鉤爪を以て殺したが、自身、齡が盡きた。しかし、察八兒への企畫の最中であつた。察八兒はかれの企畫を知ると、自身の兄弟たる仰吉察兒、臣僚たち、側近たちとともに皇帝の 1200 匹の鋪馬を以て、皇帝の御前に向かった。Ĥān-baliq < Qan-baliq 中都 (=南城) に到着すると、仰吉察兒は毒入りの šarbat ^{シャルバト} 舍里八 (=煎諸香果泉，調蜜和而成) を以て殺された。いっぽうで察八兒を御前の侍奉に命じた。如今まさに、陛下の侍奉である。

『元史』卷二十二「武宗本紀」“[大德] 十年七月 (1306 年 8 月 10 日～9 月 8 日)，自脫忽思^{トクズキョル}圜之地^{アルタイ}踰按台山，追叛王幹羅思^{オロス}，獲其妻孥輜重，執叛王也孫禿阿等及駙馬伯顔^{バヤン}。八月，至也里^{イル}的失之地，受降諸王禿滿^{トゥメン}・明里鐵木兒^{メンリクテムル}・阿魯灰等降。海都之子察八兒逃于都瓦部^{カイドウ}，盡俘獲其家屬營帳。駐冬按台山。降王禿曲減復叛，與戰敗之，北邊悉平”，『國朝文類』卷二十三元明善「太師淇陽忠武王碑」，卷二十六虞集「句容郡王世續碑」，『大元馬政記』21b「刷馬」“武宗皇帝至大三年三月十一日 (1310 年 4 月 11 日)，丞相別不花奏「尙書省・樞密院等官議：西面察八兒等諸王・駙馬多年不曾朝會。今始來降。振起其軍站物力。合拘刷馬正」。奉聖旨，准」，『元史』卷二十三「武宗本紀二」“[至大三年三月]庚寅 (十二日=4 月 12 日)，太陰犯氐，尙書省臣言「昔世祖有旨，以叛王海都分地五戶絲爲幣帛，俟彼來降賜之。藏二十餘年。今其子察八兒向慕德化，歸覲闕廷。請以賜之」。帝曰「世祖謀慮深遠。若是待諸王朝會，頒賞既畢，卿等備述其故，然後與之，使彼知愧」”，“[六月] 壬申，以西北諸王察八兒等來朝，告祀太廟”，『國朝文類』卷九姚燧「至大三年十月赦」，『元史』卷一一七「牙忽都傳」。

46) 『モンゴル時代の「知」の東西』 p. 703.

補 註

[補 1] *Ġāmi' al-Tavāriḥ*, MS: Istanbul, f. 131a-131b, MS: Taškent, f. 102b-103a.

【第三子オゴデイ・カアンエムチュの ḥaṣṣah = 梯己エムチュ: 四千戸】

- ① *Īlūkāi* < *Ilügei* 亦魯該イルゲイ / 亦魯格イルグの千戸: 札剌兒部ジャライルの出身であった…
- ② [*AYLKṬW* / *AYLKṬWA*] < *Elege/Elige-to' a* 也里可禿阿エリゲトゥアの千戸: 孫都思部スルドゥスの分枝たる Tam'aliq < Tamγaliq 種族出身の *Eljigidei* 額只吉歹エルジギデイの兄アカであった…
- ③ *Dāir* > *Dayyir* 答ダイ亦兒イルの千戸: Mönglik-ecige 蒙力克父モングリクエチゲの uruq 宗族に屬する Qongqotan 黃忽答部コンゴタンの出身であった。
- ④ ■■■の千戸: 原本に無かった。

の■■■が Qavgatai, 迭該デゲイ (別速惕部ベスウト) の別名か子弟だった可能性がある。なお、上記の寫本に先行するテヘラン本系統の MS: Paris, suppl. persan 209, f. 168b をみると、①~④全ての記述が無い。MS: St. Petersburg, PNS 46, f. 83a では“四千戸”と書いておきながら、③④が無い。“原本”の意味を確定する上で、重要な箇所といえる（上記寫本のチャガタイの四千戸の後ろ二つの千戸の箇所にも[原本に無かった]とあり、テヘラン本系統では確かに当該箇所は存在しない）。

[補 2] *Mu'izz al-Ansāb*, MS: Paris, f. 34b-35a, MS: London, f. 35b, MS: India, f. 36b.